庭反Ⅱ遺跡・他

昭和61年度調査報告書

昭和62年1月

島　根　県

湖陵町教育委員会

序　　文

本書は、昨年にひき続き湖陵町大字常楽寺の庭反Ⅱ遺跡の調査に関する昭和61年度の結果報告であります。この調査は、昭和61年度簸川南二期地区広域営農団地農道整備事業に伴う施行予定線上に所在する水田部分の発掘調査及び高丸城跡の遺跡確認、並びに地名から「狩山」「馬場」地区の一部と、西蓮寺裏山の古墳について試掘調査をして確認したものであります。

昨年もそうでありましたが、本年も、県教委の絶大なご配慮により、調査員並びに補助員の派遣をいただき、調査時期が、５月下旬から７月下旬に到る梅雨時期であり、樹木や草が生い繁る地帯や重粘質の土質のため測量、諸調査にご苦労が多かったと思います。

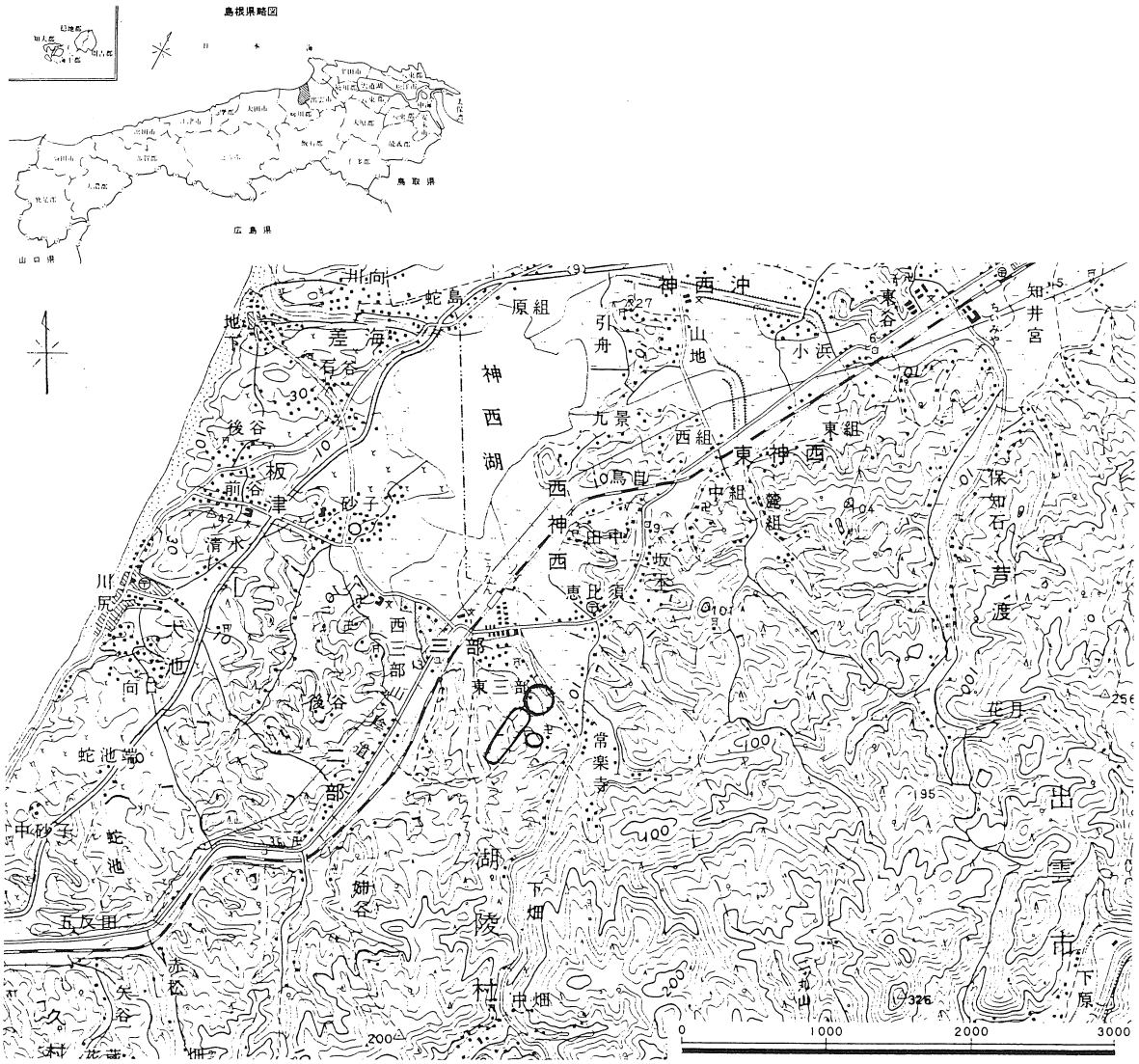
幸い、こゝにその成果を多数の資料をそえて刊行するはこびとなりましたことは、貴重な歴史的資料としても、今後大いに役立つことと信じます。

おわりに、県教育委員会文化課の方々、出雲農林事務所の方々のご配慮ご支援に感謝し、直接調査に当られた調査員及び補助員の方々並びに地元関係各位のご理解ご協力に対し厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和62年１月

湖陵町教育委員会

教育長　　福　間　堅　伍


島根県略図
日本海
鳥取県
広島県
山口県
神西沖
知井宮
東谷
小浜
山地
引舟
原組
蛇島
向
差海
地下
石谷
後谷
板津
前谷
清水
川尻
大池
向日
蛇池端
中砂子
蛇池
五反田
赤松
矢谷
砂子
神西湖
九景
西組
東組
東神西
鳥目
中組
鏡組
西神西
田中
坂本
恵比須
三部
西三部
東三部
後谷
姉谷
常楽寺
下畑
中畑
杜陵
保知石
芦渡
花月
出雲市
下原
丸山
0
1000
2000
3000

位　置　図

例　　言

1．本書は、湖陵町教育委員会が、県営の籔川南２期地区営農団地農道整備事業にかかわる予定地内の庭反Ⅱ遺跡（昭和60年度緊急発掘調査地の続き地）、狩山地区、馬場地区、高丸地区、西蓮寺山地区について、出雲農林事務所からの受託によって実施した昭和61年度の発掘及び分布調査の成果報告書である。

2．調査は、昭和61年５月24日から昭和61年８月５日まで行い、その後、遺物の整理と成果のとりまとめを行った。

3．調査体勢は次のとおりである。

調査主体者　湖陵町教育委員会　教育長　福間堅伍

調 査 指 導　蓮岡法暲（島根県教育庁文化課課長補佐）

　　石井　悠（同第２係係長）　西尾克己（同第１係主事）

調　査　員　杉原清一（島根県文化財保護指導委員）

調査補助員　桑原真治　板垣　旭（島根県教育庁文化課派遣）　藤原友子（三刀屋町）

事　務　局　園山長俊（湖陵町教育委員会教育課長）　梶谷尚武（同社会教育係長）

4．調査にあたって次の方々から援助・協力を得た。

出雲農林事務所耕地第二課　江角稔郎（地元地区区長）　立花建設

森山泰三　米山茂樹　吉田　隆　湖陵小学校

5．本書は、杉原・藤原・梶谷が編集し、本文は梶谷・桑原・杉原がそれぞれ分担執筆した。各文末に氏名を記す。遺物の実測は桑原・板垣・杉原が行い、図版等の浄書は藤原が行った。

6．本書中の実測図について、方位は調査時の磁針方位を示す。

7．出土遺物は、湖陵町教育委員会に保管する。

8．本書の巻末に付篇として、当該遺跡に関連する常楽寺遺跡の試掘調査概報（1981年４月）を、調査担当者であった島根県教育庁文化課主事卜部吉博氏の許諾を得て収録した。

目　　次

序　文 …… 湖陵町教育委員会　教育長　福間堅伍
例　言

Ⅰ．調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ．立地と周辺の遺跡 …… 2
Ⅲ．調査の成果　調査の方法　調査の経過 …… 10
A．庭反Ⅱ遺跡　調査　土層の配列と遺構面　柱穴遺構　出土遺物　小結 …… 13
B．狩山地区 …… 32
C．馬場地区　発掘状況　遺物 …… 32
D．高丸地区　試掘状況 …… 35
E．西蓮寺山古墳群 …… 37
Ⅳ．まとめ …… 39

付編　常楽寺遺跡発掘調査概要 …… 53
図1　常楽寺地形図　図2　遺構図 (1)　図3　遺構図 (2)
図4　遺物図
図版　遺構・遺物

図　表　目　次

図　位置図
1. 遺跡分布図 …… 3
2. 中島・他遺跡出土土器 …… 4
3. 倉道古墳出土遺物 …… 6
4. 地形実測図 …… 11
5. 庭反　土層断面図 …… 14
6. 遺構図 …… 16
7. 遺物の散布状況 …… 17
8. 遺構XVII図 …… 21
9. 弥生・古式土師器 …… 24
10. 歴史時代の土師器 …… 26
11. 須恵器 (1) (2) …… 28
12. その他の遺物 …… 30
図13. 狩山　トレンチと出土品 …… 32
14. 馬場　土層の断面 …… 33
15. 出土遺物 (1) …… 34
16. 〃 (2) …… 34
17. 高丸　土層の断面 …… 36
18. 西蓮寺山古墳　墳丘実測図 …… 37
19. 〃　試掘断面図 …… 38

表 1. 調査区別面積と柱穴ピット数 …… 15
表 2. 庭反Ⅱ遺跡出土遺物集計表 …… 22

Ⅰ．調査に至る経緯

本調査は、昭和60年度から建設が始められた簸川南二期広域営農団地農道整備事業に伴う遺跡調査事業として出雲農林事務所からの委託により湖陵町教育委員会が農道整備予定線上の分布を含めて調査をしたものである。

昭和60年度は、工事中発見に伴い年度内工事の予定地内のみを実施したが、本年度は出雲農林事務所と協議の上、それに続く部分と計画線上の全てに亘る分布調査を実施した。

調査地は、周知の遺跡のかなり分布している地域であり、その関連も合わせて検討し、地域の古代の状況を知る上でもその成果が期待される調査であった。

この地は古く、神門郡滑狭郷に属していたところであるが、その郷の中心地がどこであったのかは、はっきりしない面が多いが、村落の中心地の一つであったことが考えられる区域であり、神門の大海を望む古代人の生活の場として暮しやすいところであったと思われる。町教委では、不明な点の多い町古代史の解明の一助として大きな期待をし、旧地名や言い伝えの確かさを知る上でも町民の感心も非常に高いものがあった。

昭和60年度に続いて本年度も、県の文化財保護指導委員の杉原清一氏に調査を依頼して実施した。調査は昭和61年５月24日に開始し、８月５日に現地調査を終えた。梅雨の時期でもあり、水田、山林及び谷と条件的に非常に悪く、大変なご苦労をいただいたものと感謝しているところである。

又、県文化課には、補助員の派遣を始めとして全面的なご協力をいただき、調査予定期間内に、調査を終了することができた。

この調査で、古墳２基も確認される等大きな成果を上げることができたが、これも地権者の方々のご理解とご協力の賜物であると感謝している。

（梶谷尚武）

Ⅱ．立地と周辺の主な遺跡

庭反Ⅱ遺跡の所在する丘陵は出雲地方では比較的数少ない台地状の地形を呈している。常楽寺川と山田川に挟まれたこの丘陵は、南へ、また西へ向うほど高くなり、急峻な地形となり、東側と北端部では尾根上にゆるやかな平坦面をいくつも形成しており、大部分が水田、宅地と化している。そして尾根の先端は急斜面をもって周囲の平野へ消える。同様の地形は山田川を挟む反対側の丘陵（西三部）においても認められ、周囲の地形に比して独特の景観を形づくっている。そして丘陵から北に見おろす水田地帯は、かっての神西湖(「出雲国風土記」に記載の神戸水海が縮小し湖となったと考えられている。)が常楽寺川や姉谷川の沖積作用によって形成されたものと想像される。

さて、このように古代においてもその地形的な面や水運などから、生活の場として非常に適していたと思われ、実際に数多くの遺跡が存在する。しかし反面、現在に至るまで、その適性から遺跡の遺存状況は良くなく、古墳の上にも多くの墓が、そして集落の上に集落がといった状況が繰り返されてきた。現在知られる遺跡の大半は、20年近く以前にすでに発見されていたもので、調査が行われたのは今回を含めて数回にすぎず、遺跡の詳細はほとんど判らないのが実状である。また後述するが、当時採集された遺物のうちいくつかは出土地点が不明であったり、保管場所から消失してしまったものなどがあり、まして公表された遺物は極く一部にすぎない。今回その中より、湖陵町小学校の保管する遺物(米山博敏氏の採集品が大半と思われる。)の一部をここに紹介し、若干の検討を加えることにした。

姉谷エビス遺跡

小学校保管の遺物を整理中にメモと共にみつかったもので、メモは吉田 隆 氏から米山氏に宛てて書かれたもので、それによると、井戸掘りの際、地下４ｍの地点から木の実や木などとともに出土したということで、砂礫層でしかも湧水が多く出るということからも典型的な低湿地遺跡と思われる。場所は西三部の丘陵の西側に広がる谷あいの一角であり、周辺で同様な出土状況を示す遺跡は知られていない。

発見されたのは１点で、弥生時代前期の壺の破片である（図２－１）。 肩部に１条の沈線が引かれており、そこから上方と胴部下半は欠損している。沈線の下は突帯状に造り出されており特徴的である。沈線が段をつくるものなのか、あるいはさらに上方に沈線が入るのかは不明である。外面はかすかにヘラミガキの痕跡を残し、内面はハケメ調整の後、ていねいに横方向のヘラミガキが施されている。胴部は球形に近いと思われるが、小片で

1. 庭反Ⅱ遺跡
2. 庭反遺跡
3. 常楽寺遺跡
4. 西蓮寺山古墳群
5. 安子神社横穴群
6. 高丸城跡
7. 雲部古墳群
8. 土居構え
9. 雲部Ⅱ遺跡
10. 雲部Ⅰ遺跡
11. 森ノ前２古墳
12. 森ノ前古墳
13. 竹崎遺跡
14. 倉道古墳(群)
15. 方墳(１辺約17m)
16. 中島遺跡
17. 八幡宮横穴群
18. 姉谷エビス遺跡

図1. 遺跡分布図

あるため確定できない。前期末までは下らないと思われる。

中島遺跡

西山部の台地状丘陵の先端部分に位置し、現在は畑地となっており、遺物はほとんど採取できない。三方を平野に囲まれているが、先に触れたように古代においては湖に囲まれていた可能性がある。小学校保管の遺物の中でも比較的数量が多いが、ほとんどが細片である。「中島」と註記されていたので、この遺跡出土品と判断した。図示できるものは少ないが、弥生時代の遺物がかなり存在するのは注目される。

（図２－２）は壺形土器の口縁から頸部にかけての破片である。頸部は直立し、口縁部はほぼ水平に開く。口縁端部はわずかに拡張し平坦面をつくり、そこに２条の凹線を巡らす。頸部外面は縦方向のハケメ、口縁端はヨコナデ、頸部内面は指頭圧痕を残し、口縁部内面は横方向のハケメ調整が見られる。口径は推定23cmを測る。（図２－３）は甕形土器の口縁部で２と同様の口縁端部をもち、磨滅しているが、２条の凹線をもつものと思われる。推定口径は22cmである。２・３とも均一な大きさの砂粒を含み、白褐色を呈する。両者とも弥生時代後期前半のものと思われる。（図２－４・５）は底部の破片で、４は体部の立ち上がりが急で、内面に指頭圧痕を残す。底部と体部の厚さはほぼ等しい。５は内面にヘラケズリが施され、体部は逆八の字状に開き、底部の厚さは中央が薄い。５は弥生時代後期のものと思われ、４はそれより古い可能性が強いと思われる。他にも同様な底部片が数点存在する。（図２－６・７）は須恵器の蓋で２点とも円形のつまみがつくものであり、さらに同一形態、同一手法をもつこと、胎土、焼成とも極似しており、保管状態からみて

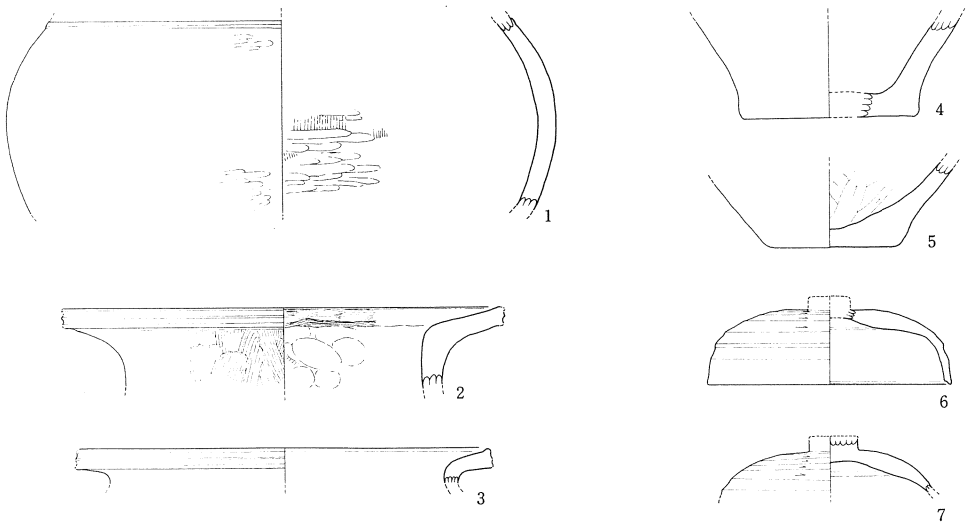


図2.　中島・他遺跡出土土器

も一括して出土した可能性がある。体部上面は段に近い位置までヘラケズリが施され、段以下は垂直ぎみに落ちる。６は口径は推定13cmを測る。口径に比し高さがあり、体部と口縁側部の境に段を有し、端部はいわゆるノミ刃状を呈し、ヘラケズリもていねいであることなどから、山陰の須恵器編年のII期に属すると考えられる。この他にも時期のわかる遺物があるが、その大部分は須恵器の細片である。また石器として採集されたもののうち大半は自然石であり、太形蛤刃石斧１点も見出された。町誌によると、この丘陵上には戦国期の荒神塚も多く、刀剣も掘り出されたらしいが、未確認である。

倉道古墳

古くから知られている古墳であり、町誌や関係者の話によると以下のとおりである。同古墳は森山泰三氏宅の前庭に位置し、昭和43年の夏に発掘されており、全長約４ｍ、幅約１ｍ、高さ約0.7ｍを測る横穴式石室で、三方は扁平な自然石が積まれ、入口はやや大きな四角い石で閉塞されていたようである。またそれ以前にも発掘されていたらしく、東壁と蓋石の一部は取り去られ、土器も一括して埋めてあったということである。石材は庭石や石垣に転用されており現存する。

遺物の一部（図３－２、13）は森山氏宅に保管されており、他は米山氏が一時保管し現在小学校に移されている。また、当時島大生であった西尾克己氏（現在県文化課主事）が米山氏の保管していた遺物の実測図とメモを採られており、そのメモによると、

蓋坏……蓋３点、坏４点……うち蓋２点、坏２点は実測

高坏……１点（坏底部のみ）……実測

碌……２点（うち１点は小片）……１点実測

有蓋短頸壺……１組

提瓶……２点……１点実測

須恵器片小数

刀片……１点（鐔片もあり）……実測

（山陰の須恵器編年の）III期の古い様相を呈し、同様な例に大念寺古墳出土の蓋がある…。

ということになり、現在小学校で保管されているものと数の上で若干異なる。西尾氏の実測図と照合できたのは（図３－１、４、７、９、15）であり高坏と鉄器は確認できなかった。また実測図はないが、西尾氏の話から、提瓶16と短頸壺12とその蓋11はほぼまちがいなく、この古墳の出土と思われる。また小学校保管の遺物で注記のされていたのは10だけであったが、一括して保管されていた事や、付着している土、復元ぐあいから、他の遺

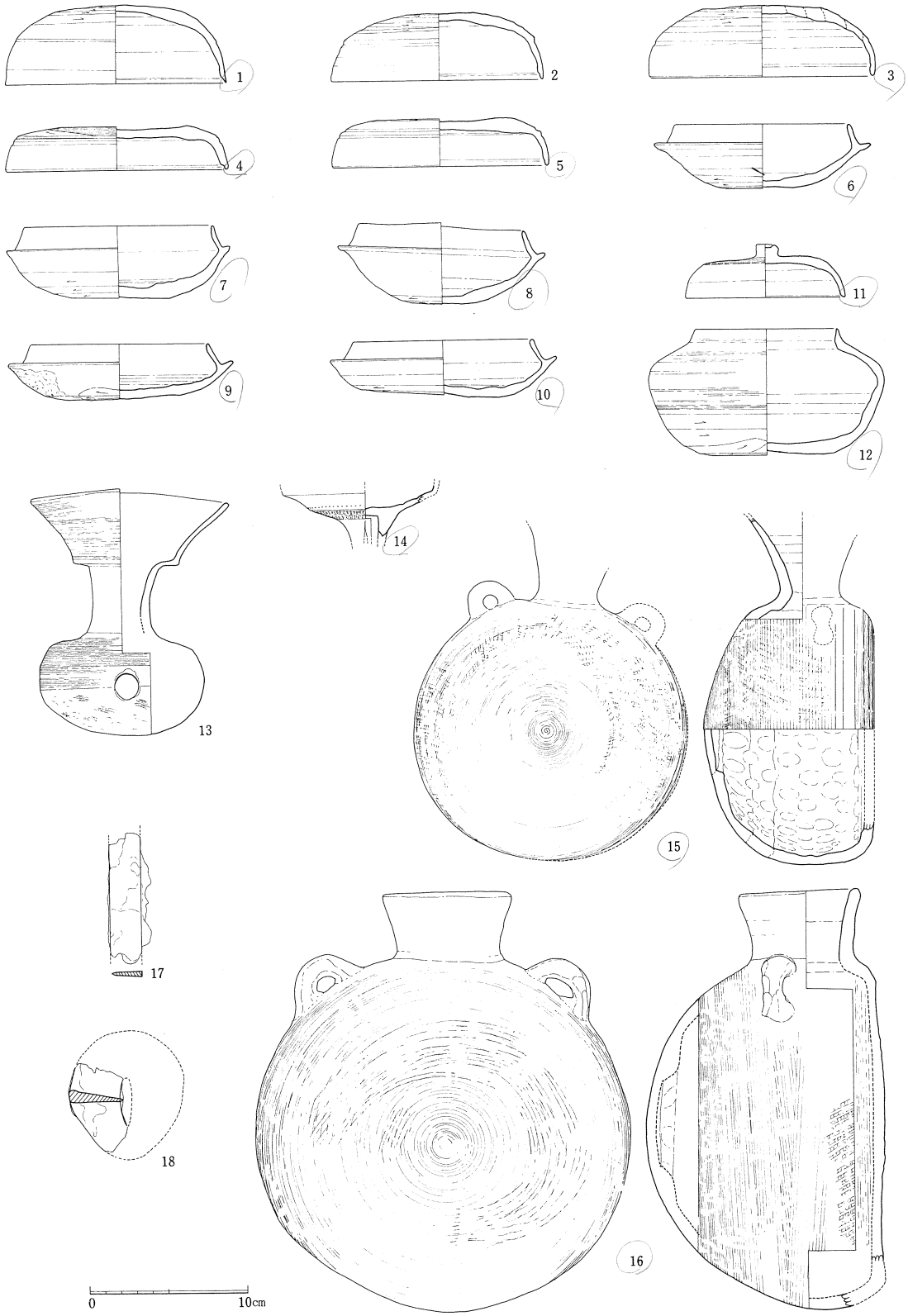


図3.　倉道古墳出土遺物

物が混入したとは考えにくく、西尾氏の実見したもの以外にも保管されていたかも知れないので、ここでは、以上の事を明記したうえで、図示できるものを全て掲載した。また高坏と鉄器2点は西尾氏の原図を使用させていただいた。

まず蓋坏の蓋は大まかに二分類でき、ひとつの類は天井が丸みを帯びて高く、段を有するもの（図3－1～3）である。断面は天井部と口縁部が薄く特徴的である。ヘラケズリは上面の半分以上に施され、部分的にケズリがゆき届いていない所がある。口縁端は内側に沈線を引いた後、以下をヨコナデによりノミ刃状としている。ただ3は沈線を引いただけで、また外側の段も凹線により簡略化されたものである。もうひとつの類（図3－4・5）は天井が低く、あるいは部分的に落ち込み、平坦となっているもので、前類の段にあたる部分を1～2条の沈線により突帯状に造り出している。器壁は天井平坦部の端部が厚くなっているのが特徴である。ヘラケズリは突帯に近い部分まで力強く施されており、4は削る前にカキメ調整が施されている。口縁端は内面に沈線を引いた後ヨコナデを施こしているが、端部側が薄くつくられている。

坏も二分類でき、（図3－6～8）は器高が高く、受け部の先端がやや外反するもので器壁は底部が極端に薄くなっているのが特徴である。ヘラケズリは体部の半分以上に施されており、全体に優美な感じをもつ。（図3－9・10）は器高が低く、受け部の先端は体部からそのままやや長く伸びる。器壁はほぼ一定している。ヘラケズリは体部の半分以上に力強く施されており、その部分は焼成時の変形がみられるものもある。

（図3－11）は短頸壺の蓋で、突起状のつまみを有する。天井にカキメが施される。

（図3－12）は11とセットと思われる短頸壺で、ほぼ完形品に近い。肩部から口縁部にかけて一体感のある、肩の張ったしっかりしたものである。肩部から胴上半部はカキメの後回転ナデ、下半はヘラケズリが施される。

鼎（図3－13）は頸部が長く口縁部は薄く、大きくラッパ状に開く。口縁部外面と体部上半にカキメが施され、下半はタタキ痕をナデにより消している。完形品。

高坏（図3－14）は西尾氏の原図によると、4方向に三角形の透しがあり、おそらく長脚の二段透しとなると思われる。また磨滅によりはっきりとしないが、坏底部外面に1列の刺突文、さらに沈線にはさまれた2列の退化波状文が施されていたようである。

提瓶は大小2点あり、（図3－15）は小形で、口縁はラッパ状に開くものと思われ、把手は欠損するが、環状を呈するものと思われる。図示した様に内面は指頭圧痕と継ぎ目がはっきりと残っており、外面はタタキ痕、ケズリ痕をカキメにより整形するが、十分に消しきっていない。大形の方（図3－16）は口縁部があまり開かず、両肩に把手が残る完形に近いものである。内外面とも15に比して丁寧に仕上げられているが、全体に厚ぼったい印

象を与える。

鉄器は確認できなかったので西尾氏の原図から判断するしかない。（図３—17）は直刀片でややねじれていた可能性もある。（図３—18）は鐔片である。

以上の遺物は、全てが同古墳出土でないとしても、西尾氏の記録どおり、山陰の須恵器編年のⅢ期に属し、しかもⅣ期の遺物は含まれない。また蓋坏は出土状況や保管における数の問題などがあるので断定できないが、蓋１、２は坏７、８のいずれかに、蓋４、５は坏９、10のいずれかに対応する可能性が強いと思われる。先述のごとく２分類したのは、成作技法上でかなり差異が感じられ、この差を時期差とすれば、３、６のようなものをどう考えるかといった問題も生じる。また鐙は当地方では奇異な形態、技法をもっており、しいて言えば、地域色のひとつといえるかもしれない。いずれにせよこの時期に当地においてすでに横穴式石室が存在していたのは確かであろう。

米山氏が地元向けの小冊子「竹馬（ちくば）」の中で倉道古墳について興味深い事実を述べられている。それによると、この古墳の近辺で米山明広氏が昭和二十三年、開墾中に石積を掘り出したこと、さらに三上毫三郎氏の墓地の土止めとして古墳の石材が使用されていることなど注意される点が多い。現在もこの尾根上は広い墓域となっており、地形も変化しているが、一番高所である地点に１辺約17～18m、高さ約1.5mの方墳を１基確認した。こうした古墳群中の１基が倉道古墳と思われ、群内では北端に位置する。

音部（雲部）古墳群

町誌によると音部の墓地から土砂崩れにより舟型石棺が出土し、埋め戻された旨記されている。また他にも石室を有する古墳が存在していたらしく、石材の一部が積まれているとのことであった。現在も墓地により地形がかなり変容しているが、断面に古墳の主体部と思われる石組みや、川原石が散在していることなどから数基の古墳が存在していたと思われる。また西尾氏によると前述の舟型石棺の写真を見た事があり、石枕を内部に造り出したものであったらしい。

安子神社横穴群

町誌によると、古くから７～８穴が開口していたが昭和39年の豪雨の際、新たに数穴が開口し、須恵器多数と圭頭太刀（「さんいん古代史の周辺」山陰中央新報社刊に実測図が掲載）が１口出土している。写真も残るが、保管先がよくわからない。一部は小学校に保管されているが、高坏や甕の小片のみである。

今回代表的な遺跡を一部の遺物と共にここに紹介したが、確認できなかった遺物の追調

査が必要であろう。また紹介しきれなかった遺跡、遺物も公表されることが望ましく、関係者と地元の人々により今後公表される機会が来ることを期待している。

分布図（図1）を見てもわかるように、この東三部を中心とする地域は西側の尾根上に古墳群を背し、東の台地状を呈する尾根上に集落遺跡が位置するという、現在のそのあり方と共通する。このように当時（古墳時代）の集落と墓域がつかみやすいと思われる例は数少なく、そういう点においても、地域史研究の上で欠くことのできない遺跡群である。

最後になったが、文化課の西尾氏、森山泰三氏、そして故人となられたけれど、筆者も小学校時代お世話いただいた、米山博敏氏に心から感謝の意を表したい。

なお、文末となったが、この文を清書中に新しい情報が入り、安子神社横穴群の遺物の保管先が判った事、未確認だが、須恵器の窯が存在するらしい事。音部古墳の舟型石棺の写真が入手出来そうな事などである。提供者の西尾氏に再度感謝する次第である。

（桑原真治）

参考文献

「湖陵町誌」　湖陵町　昭和45年

「竹馬」（地域史誌）　米山博敏

「山陰の須恵器編年」『山陰古墳文化の研究』　山本　清　1971

Ⅲ．調査の成果

1．調査の方法

本年度の調査は昨年度緊急発掘した部分に接続する水田部分を引続き全面発掘を行うことの他に、さらに施工予定線上に所在する高丸城跡の遺構確認や、その間の区域における遺跡の確認を行うことである。

既に昨年度において行った予備踏査で高丸城跡のほかに、地名から「狩山」「馬場」地区の一部と、西蓮寺裏山の古墳の一部が施工区域に関与することが判っていた。これらについて試掘を行って確認することである。

調査は施工予定区域を中心とするほぼ全域の地形実測を行ったのち、庭反Ⅱ遺跡（A）は全面発掘を、狩山地区（B）、馬場地区（C）、高丸城跡（D）、西蓮寺山古墳（E）についてはトレンチやグリッドを設けて確認することとした。

2．調査の経過

調査は5月23日から開始し、先ず耕地部分についての平板実測を行い調査区画を設定した。

庭反Ⅱ遺跡については耕作土とその下の埋立てた盛土部分が深いので、これは重機によって排土を行った。排土の処理は四囲の耕地が稲作期間中のため土置場が確保できず、止むをえず調査区を一次と二次とに分割した。後半区域の上に先ず排土を盛り上げて前半の発掘を行い、後半の発掘は調査の終了した前半部分に排土を盛って行った。重機による排土作業は都合3日間を要した。

さらにその延長上にあたるかって谷地形であったところの水田部については確認のグリッドを設けた。

狩山・馬場についてもトレンチとグリッドを配置した。

これと併行して高丸城跡から西蓮寺裏山に至る山地部分をトラバースを組んで地形測量を行い、縦横断のトレンチを設定した。

これらの作業期間は次のようであった。

耕地部分地形測量	5月24日～5月27日
山地部分地形測量	6月3日～6月12日
庭反Ⅱ遺跡（一次発掘）	6月12日～6月30日
〃　（二次発掘）	7月2日～8月5日
〃　（谷田部分グリッド発掘）	7月2日・25日

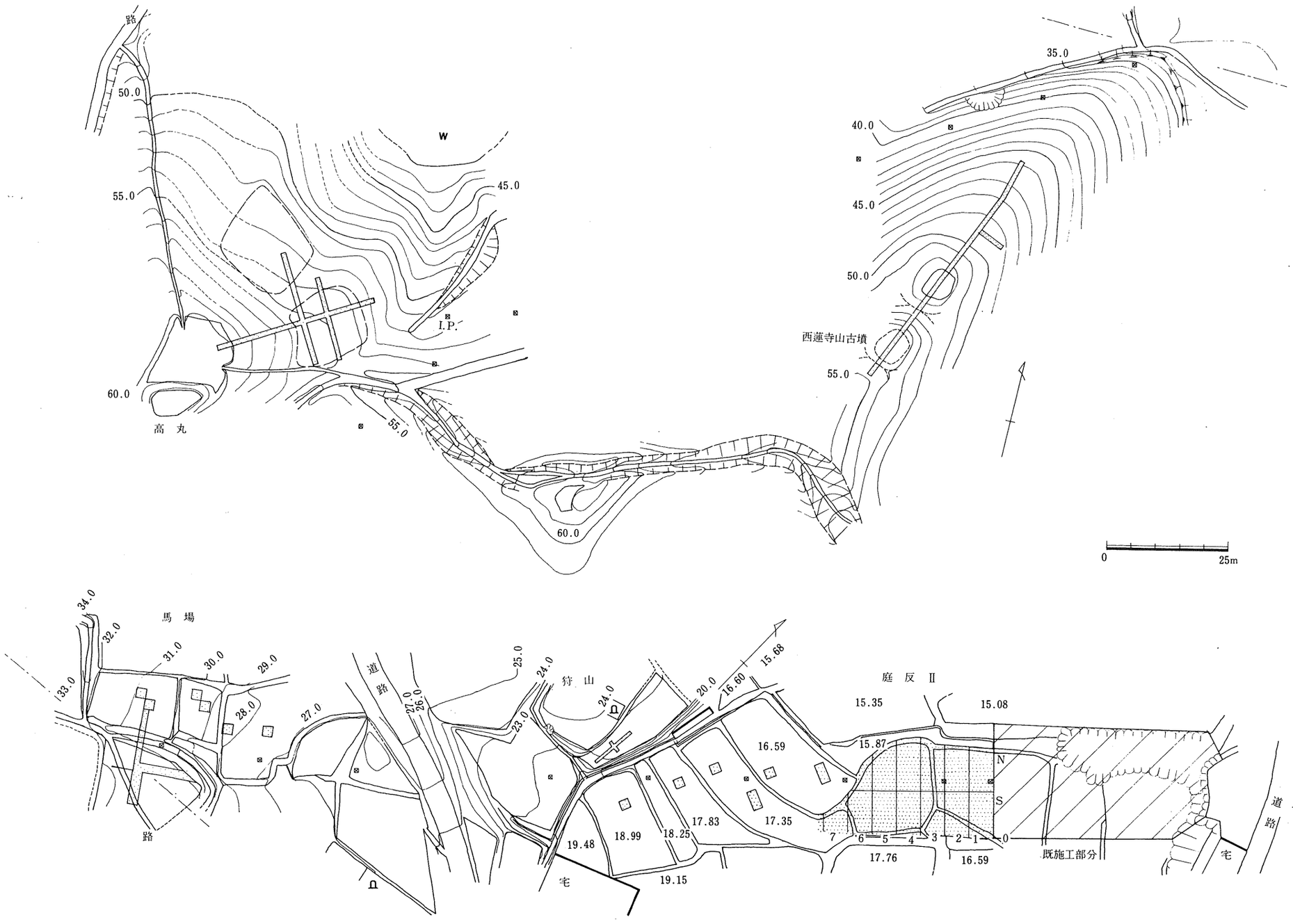

路
50.0
55.0
60.0
高 丸
W
45.0
I.P.
55.0
60.0
35.0
40.0
45.0
50.0
西蓮寺山古墳
55.0
0
25m
34.0
32.0
馬 場
31.0
30.0
29.0
33.0
28.0
27.0
路
道
路
27.0
26.0
25.0
24.0
狩 山
24.0
23.0
20.0
16.60
15.68
庭 反 Ⅱ
15.35
15.08
15.87
16.59
17.83
17.35
19.48
18.99
18.25
19.15
17.76
16.59
N
S
7
6
5
4
3
2
1
0
既施工部分
宅
宅
道
路

図4. 地 形 実 測 図

狩山地区トレンチ調査	7月25日・26日
馬場地区トレンチ・グリッド調査	5月26日～6月2日
高丸城跡部分トレンチ調査	6月3日～6月6日・8月4日
西蓮寺山古墳墳丘測量・トレンチ調査	7月14日～7月18日・7月26日
器材撤収・現場作業終了	8月5日

この間、特に山地部分においては施工計画の杭が見当らないところもあり、また植生の繁る季節でもあることから測量作業は思いのほか捗らなかった。

また重粘質の地帯であることに加えて梅雨期であったことから降雨のため作業の不可能な日が多く、期間中で合計12日は休み、8日は資料・遺物の整理作業を行った。このため現場の終了が予定より大幅に遅延した。

A．庭反Ⅱ遺跡

1．調査

調査地点は昨年度全面発掘を行った部分に接続する区画であることから調査区の設定も昨年度に準じて行い、基準点も工事杭（No.77＋10）の西2mに置いた昨年度のNo.0杭を活用し、昨年度の成果図との接合を考慮した。

調査区はこの基準杭から施工計画線に平行して5m毎に1～6区とし、この中心線によってそれぞれをさらにN(北)・S(南)の区とした。

この区域は盛土されて拓かれた水田であり、盛土中には遺物はないことが昨年の調査で判明していたので、この盛土～耕土の除去は重機によることとした。

さらに北寄りには湾曲して入る谷部とみられる水田があり、その部分にはグリッドを設けて検討した。

2．土層の配列と遺構面（図5）（図7）

全面発掘区域には水田3枚が関与しており、地山は北に向かって緩やかに下降する地形である。この地山上に、北半分の区域には薄く旧表土が残存し、この上には調査区全域にわたって埋め土を厚さ50～15cm置いて水田に拓いていた。即ち、水田表面から厚さ15cmの耕作土、厚さ8～12cmの固く締まった鋤床層、そして厚さ0～30cmの埋め土がある。これはすべて削り出した土を移動した埋土で同一の土であり、水田にしたための層分化したものである。

このようにかっての水田造成は調査区域の東～南側のより高位の部分を削り、その土を

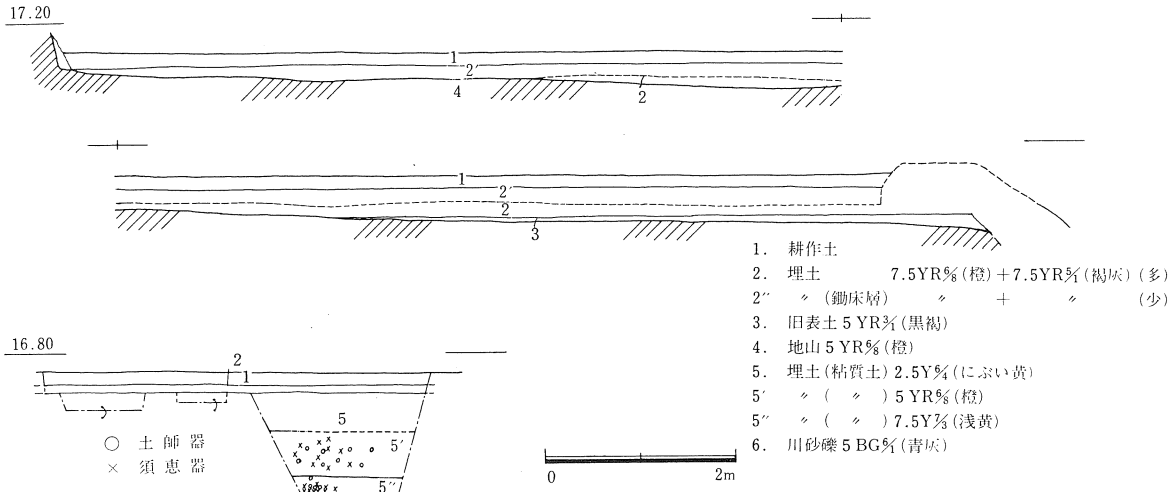


図5. 土層断面図

北の谷間や調査区域等へ敷いて埋めたもので、旧表土の多くとともに地山も南側部分では深く削り取られており、遺物を多く含む旧表土はわずかに北側部分に薄く認められるものの、すべて攪乱されたものであった。なおこの旧表土上には細片となった土器片が多く含まれていた。

遺構はすべて柱穴状ピットであり、地山面に達してはじめて確認できたが、地山面の加工は認められず、これら柱穴は旧表土の上から穿ったものと推察された。

また山寄り区域である谷地形部分の水田グリッドでは1.5m以上を埋めたてて水田を拓いたもので、埋土の下には川礫土があり、谷底の小川であったことが判った。

3. 柱穴遺構（図6）

地山面は北が低く南が高い28mで落差約60cmの緩斜面であるが、南側約 1/3 の区域である。4S・6S区、5N・6N区では地山面も削られており、柱穴等もほとんど失われていた。

昨年度に続く位置の0N～2N区及び0S～1S区には多くの中小柱穴状ピットが認められた。これらのピットは暗褐色の薄い攪乱された旧表土層を除いた粘土質、地山面に至ってはじめて認められる。

ピットへの落ち込み土はすべて黒～黒褐色土で、これに細片の土師系土器片がわずかに混入するものもあった。この土は旧表土と同じもので、土器片はほとんどが水平に近い状況で立位のものがないことや、人為的に穴に投入したものではなく自然の流入土とみられ、これらのピットはいずれも旧表土上から穿たれたものであったと考えられる。

但し調査区域の北西端に近い2N～3N区において、並列する長方形の落ち込み部（2

区	面 積	ピット数	地山面削減程度
0S	4.1	11	昨年度調査の残部分
0N	4.1	11	
1S	41.0	51	0
1N	40.5	48	0
2S	41.3	34	70％
2N	41.3	52	0
3S	41.8	51	50％
3N	46.2	63	0
4S	41.3	6	100％
4N	48.0	49	10％
5S	41.3	5	100％
5N	38.0	16	70％
6S	38.0	—	100％
6N	10.5	—	100％
計	477.4	397	

表１．調査区別面積と柱穴ピット数

ＮＰ40・Ｐ41）は他のピットの場合と異なりやや淡い灰褐色の落ち込み土であり、それに重複して黒褐色土の落ち込む柱穴状ピット（３ＮＰ12）が後から穿たれたもので、前者は付近に多数存在する中小柱穴群より一段古いものとみられた。

今回の発掘で検出した柱～杭穴は総数397で３Ｎ区に最も多く、次いで１Ｓ・１Ｎ区であった。また４Ｓ～６Ｓ・５Ｎ・６Ｎ区ではピットは殆ど認められず、地山面も通常深い位置にみられる塊状構造の土塊が表面にみられ、明らかに地山上面が削平されていた。

認められたピットの多くは直径20cm前後の中形のものと直径15cm前後の小形のものの二群に分けられる。しかし、いずれも整然とした建物プランになるものは極く少なく、３又は４穴を結ぶ直線プランとしてしか認められないものもあった。これらの線方向はほとんど南北方向に近似し、又はそれに直交するものであった。

不完全ながら建物プラン５、柱列７が認められた。これらには昨年度調査区域の連続であることから、その番号を継承して建物プランⅥ～ⅩⅦとした。

このほとんどが小さい柱の1×2間又は2×3間の堀立プランであるが、ⅩⅦは全く趣を異にし並列する長方形の浅い掘り込みの底部から各３穴の大型掘り込みを行ったものである。

１）建物Ⅵ

１Ｓ区にみられたプランで１ＳＰ21が南西隅角にあたり、桁方向は磁北に対しＮ２°00′Ｗである。確認されるのは１ＳＰ21から北へ１ＳＰ11、０ＳＰ７へ各2.10mの間隔で２間が認められ、梁行方向は１ＳＰ21から2.5ｍの１ＳＰ16となり、これが南東隅にあたり梁行１間とみられる。なお北東隅角部は前年度調査の区域でありその０ＳＰ68に相当すると思われ、結局桁行4.2ｍ（２間）× 梁行2.5ｍ（１間）の堀立建物であったと考えられる。柱穴の底レベルはほぼ同じで、地山面から25～30cmの深さに掘られており、ピット径は隅角部にあたる０ＳＰ７・１ＳＰ21・１ＳＰ16は25～30cmと太目であり間柱である１ＳＰ11は21cmとやや細くしかも先細りである。これらの柱穴の落ち込み土

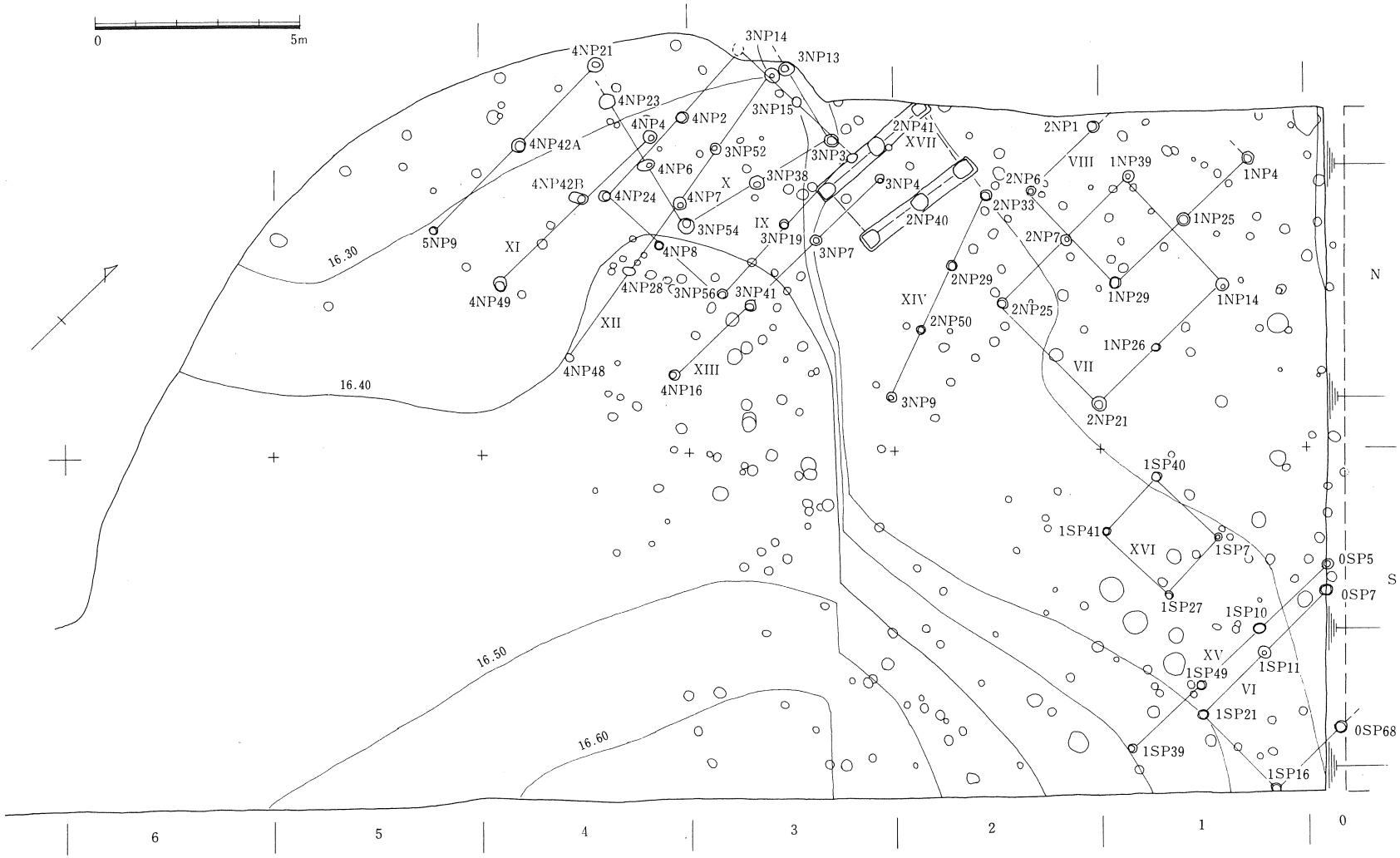

0
5m
N
S
4NP21
4NP23
4NP42A
4NP42B
4NP4
4NP2
4NP6
4NP24
4NP7
4NP8
4NP28
4NP49
4NP48
4NP16
5NP9
3NP14
3NP13
3NP15
3NP52
3NP38
3NP3
3NP4
3NP54
3NP19
3NP7
3NP56
3NP41
3NP9
2NP41
2NP40
2NP1
2NP6
2NP33
2NP7
2NP29
2NP25
2NP50
2NP21
1NP39
1NP4
1NP25
1NP29
1NP14
1NP26
1SP40
1SP41
1SP7
1SP27
1SP10
1SP11
1SP49
1SP21
1SP39
1SP16
0SP5
0SP7
0SP68
XI
XII
XIII
XIV
XV
XVI
XVII
VI
VII
VIII
IX
X
16.30
16.40
16.50
16.60
6
5
4
3
2
1
0

図6. 遺　構　図

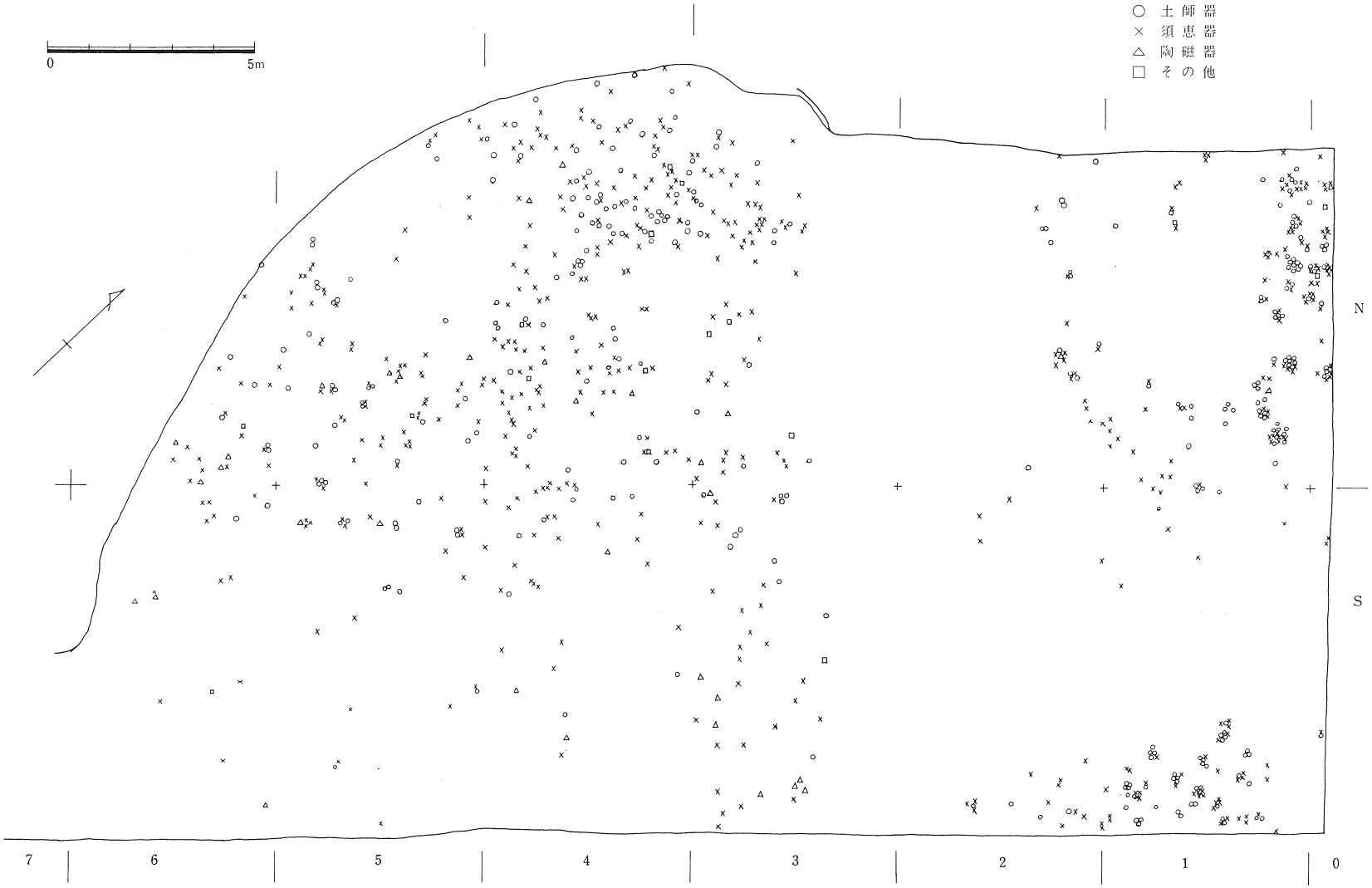


図7. 遺物の散布状況

は暗褐色土で、１ＳＰ16には古式土師器片１、丹塗り土師片１、須恵器片１が、１ＳＰ21には須恵器片１がそれぞれ混入していた。いずれも細片であり器種等は不明であるが、最も新しいものは丹塗り土師器であることから、奈良時代以降の建物であったことが判る。

2）建物Ⅶ

１Ｎ～２Ｎ区にある堀立建物で、１ＮＰ14（北東隅）－１ＮＰ39（北西隅）－２ＮＰ７－２ＮＰ25（南西隅）－２ＮＰ21（南東隅）－１ＮＰ26の各柱を結ぶ１間×２間のプランである。 桁行方向はＮ1°30′Ｅでほとんど磁針方向に一致する棟であり、柱間は各2.15ｍで桁行４.３ｍの２間、梁間は3.45ｍで１間である。柱穴は直径18～30cmで間柱がやや小さく隅角部が大きい。柱穴の深さは地山面下約15～20cmで浅いものである。柱穴に落ち込んでいる土は暗褐色土で旧表土の流入したものであり、１ＮＰ14に土師器の細片１が混入していた。時期の判定は困難であるが、落ち込み土の類似性から大まかに奈良時代又はやや下るころかと思われる。

3）建物Ⅷ

建物Ⅶに一部重複してほぼそれと同規模の堀立建物である。

１ＮＰ４（北東隅）－１ＮＰ25－１ＮＰ29（南東隅）－２ＮＰ６（南西隅）－２ＮＰ1－続きさらに調査区以外の消滅した部分に北西隅角部があったとみられる建物である。

桁行方向はＮ1°30′ＥでⅦと同じである。桁行４.４ｍ柱間２.２ｍの２間、梁間３.１ｍ１間の建物である。

柱穴の直径は南西隅の２ＮＰ６が18cmとやや小さいが、その他は25～30cmとやや大きく地山に深さ15cm前後の深さに掘られている。

柱穴ピット内への落ち込み土は同様に暗褐色土で旧表土の流入したものである。

土器片の混入はなく時期判定は困難であるが、規模・様式等ほとんど建物Ⅶと同じであり、時期もそれを前後するころのものと思われる。

4）建物Ⅸ

３Ｎ区を中心とする建物で、４ＮＰ２－４ＮＰ24（南西隅）－４ＮＰ８－３ＮＰ56（南東隅）－３ＮＰ19－（２ＮＰ41のうちにあって不明瞭……北東隅）－３ＮＰ15－（区域外……北西隅）の柱穴を結ぶ２間×２間の堀立建物である。

桁行は東側では2.３ｍと2.４ｍの4.７ｍ、西側は2.８ｍと2.０ｍの4.８ｍで各２間、梁間は南側で1.８ｍと1.９ｍで3.７ｍの２間であるが、北側は不明である。桁行方向Ｎ3°00′Ｗで柱間距離のやや不正確な建物プランである。

柱穴はやや小さく直径17～24cmで地山で20～30cmの深さを測る。落ち込み土は暗褐色

土で土師器の細片の混入するピット（３ＮＰ15・４ＮＰ２）もある。須恵器片は全く見当らないことから、Ⅵ～Ⅷよりは古い段階の建物プランとみるべきであろうか。

５）建物Ⅹ

３Ｎ区から４Ｎ区へかけて西の谷部に面した位置にある。４ＮＰ23－４ＮＰ６－３ＮＰ54（南東隅）－３ＮＰ38－３ＮＰ３（北東隅）－３ＮＰ13で建物の北西部分が調査区外にかかり、現地は削り下げられた水田部分にあたる。

桁行はほぼ東西方向のN79°00′Wであり、柱間各１.８ｍの２間が認められるが、さらに続き柱間１.８ｍでおそらく桁行３間とみられ、梁間は各2.05ｍの２間である。つまり４.１ｍ（２間）×５.４ｍ（３間）の東西棟の堀立建物である。

柱穴の掘り方はやや大きく、直径35～40cmで地山へ約10～20cm程度の掘り込みでしっかりしたピットである。落ち込み土は他と同様に暗褐色土で、わずかに土師器と須恵器の細片４（３ＮＰ13）が混入しており、奈良時代以降の建物とみられる。

６）柱穴列Ⅺ～ⅩⅤ

方形に整わないが明確に列をなす柱穴がある。そしてその多くがほぼ南北の方向である。

Ⅺ……４ＮＰ４－４ＮＰ42Ｂ－４ＮＰ49と、４ＮＰ21－４ＮＰ42Ａ－５ＮＰ６のＮ０°00′で平行する２本のプランである。柱穴はいずれも直径20cm前後、深さ10～20cmである。これが建物だとすると東列５.２ｍに対し西側の列は５.６ｍでやや長く、幅は２.０ｍで台形のプランとなりやや不自然である。

Ⅻ……３ＮＰ14－３ＮＰ52－４ＮＰ７－４ＮＰ28－４ＮＰ48の５穴を結ぶ柱列で、Ｎ11°00′Ｗのプランである。柱間距離も北から２.２ｍ、２.１ｍ、１.６ｍ、２.５ｍと不揃いであり、合計は８.５ｍである。各柱穴の直径は25～35cmである。北寄りの柱穴３穴は特にしっかりしたものであり、落ち込み土には須恵器や土師器の細片が含まれている。南寄りの２穴については地山面が既に削られているためピット底に近い部分のみが残っているので明確なプランとは言い難い。

ⅩⅢ……３ＮＰ４－３ＮＰ７－３ＮＰ41－４ＮＰ16の４穴を結ぶ柱列でＮ１°30′Ｅのプランである。柱間距離は北から2.15ｍ、2.25ｍ、２.５ｍとやや不揃いであり、合計は8.9ｍである。各柱穴は直径20～24cmで地山面から20～30cmの深さに掘り込まれ、いずれもしっかりしたピットである。落ち込み土は暗褐色土で南寄り２穴には丹塗り土師器片や須恵器片が混入しており、奈良時代以降のものとみられる。

ⅩⅣ……２ＮＰ33－２ＮＰ29－２ＮＰ50－３ＮＰ９の４穴を結ぶ柱列で、N21°00′Wのプランである。柱間距離は北から１.９ｍ、１.７ｍ、１.８ｍでほぼ１.８ｍ（６尺）に準じて

おり、合計5.4ｍである。各柱穴は直径25cm前後で地山に25～30cm掘り込んだしっかりしたものである。落ち込み土は暗褐色土で、古式土師器・須恵器・丹塗り土師器片等の落ち込みが北寄り２つの柱穴に見られ、新段階のプランとみられる。

XV……ＯＳＰ５－１ＳＰ10－１ＳＰ49－１ＳＰ39の４穴を結ぶものでＮ1°00′Ｅを測る。柱間距離は北から2.3ｍ、2.0ｍ、2.3ｍで合計6.6ｍとなる。ピットの直径は25～30cmで、地山へ約20cm程度掘り込んだしっかりしたもので、暗褐色土が落ち込んでいた。土器片の落ち込みは見られなかった。この柱列は建物Ⅵ号の西側に間隔45～50cmでほとんど平行に並ぶ位置である。

7）建物XVI

このプランは正方形に近い形となるもので、１ＳＰ７（北東）－１ＳＰ40（北西）－１ＳＰ41（南西）－１ＳＰ27（南東）の４穴で、南北1.8～1.9ｍ(６尺)、東西2.1ｍ(７尺)。各柱穴はいずれも小形で直径15～17cm、深さも地山へはやや先細りに浅く掘られている。１間×１間の簡易な建物のプランではなかろうか。短辺がほぼ南北線に近いＮ3°00′Ｗである。

8）遺構XVII

２Ｎと３Ｎ区にかかる遺構で、２ＮＰ40及びＰ41とした２本の短柵形の落ち込みで、浅い箱掘りとなっており、さらにその両端と中央の各３ヵ所に大きく深いピットを穿っている。

西側のＰ41についてみると、地山面では幅47～49cm、長さ3.35ｍの長方形でその両端に方形の深いピットを掘り、その中間にも同様の深いピットを掘り込んだもので、各ピット中心の間隔は1.45ｍとなっている。このピットは両側端と横側面は垂直に近い切り下ろしであり、ピット底も34×44cm程度の方形に近い形となっている。深さはいずれも地山面から約50cmを測り、特に深い。

東側のＰ40はＰ41に幅1.80ｍの間隔で平行し、その構造・寸法も同様であるが、南端のピット（Ｐ40－Ｃ）は15cm内寄りとなっている。

この各ピットを柱穴又はそれに準ずるものとみるならば、長辺2.90ｍ、短辺1.80ｍの２間×１間の建物プランとなり、桁行方向はＮ4°00′Ｅである。

ピットの大きさからして建てられていた柱は格別に太く、また掘りの深いことから、その高さもかなりなものであったと思われる。平面プランは小さいが、太く高い６本の柱上に設けられた特別の上屋が想像される。なお落ち込み土はやや淡い灰褐色の自然流入土とみられるもので、柱痕を示す断面は見当らない。

Ｐ41の中ほどの位置に一部内側地山面へかかる小柱穴Ｐ12があり、この落ち込み土は

他の多くのピットと同様暗褐色の土であり、明らかに後から穿ったものであることから、このP41・P40の特異なピットはより古い段階のものであることが判る。またこのことはピット内に混入落ち込んでいた土器片についても言えることで、このP41・P40では石器（図12－1）、弥生式土器・古式土師器（図9－17、15、16、7、23、10、13、21、27、28、9、3、22、8、18、19）であり、この遺跡に最も多い須恵器や新段階の土師器が全く含まれていないことから、古墳時代前期の所産と判断される。

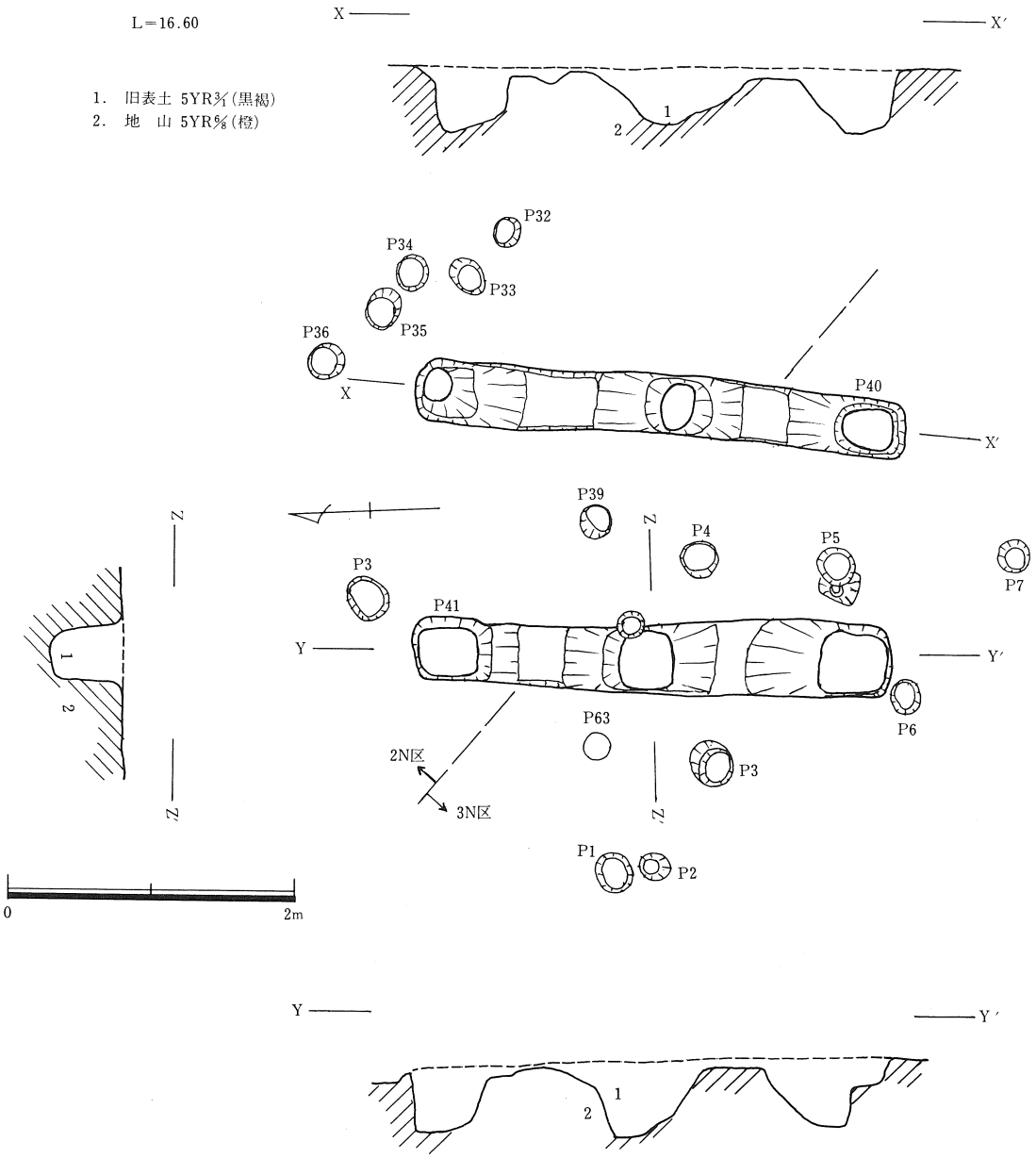


図8. 遺　構　XVII　図

4．出土遺物

1）出土状況について（表２参照）

採取した遺物はそのほとんどが土器片である。遺物の総数2272で、そのうち土器以外のものは石器・鉄滓等が50点を計える。土器片は細片が多く、古墳時代前～中期（弥生終末期のもの数点含む）217片、歴史時代の土師器172片を認めたが、あと556片はそのいずれとも判定し難いもので、都合土師系のもの945片であり、須恵器～須恵系は1150片である。さらに大まかに中世とみられるものが127片あった。

これらの約90％が丘陵地形部分に相当する水田区域によるもので、あとは攪乱土中からの表面採取と、谷地形部分の水田に設けたグリッドからの出土である。

丘陵地形にある水田部分は昨年度調査区に接続するところで、既述のようにほぼ東の低位から西高位へと０～７区とし、さらにその中心線で南北（Ｓ・Ｎ）に区分して調査区No.として遺物を取り上げた。

各区での遺物の出土状況は開田に伴う埋土中から37％、地山面上に残っている黒色土

表2　庭反Ⅱ遺跡出土遺物集計表

区	埋土中						黒色土中						地山面						ピット内落込み						
	土師器			須恵	陶	(計)	土師器			須恵	陶	(計)	土師器			須恵	陶	(計)	土師器			須恵	陶	(計)	
	古	新	不明				古	新	不明				古	新	不明				古	新	不明				
0N													4	1	8	21		34	4	1	0			5	×
0S																			3	1	1			5	×
1N							5	2	14	33		54	1	4	24	48		77	11	13	26	11		61	○
1S								1	10	17		28	1	11	23	32		67	8	9	12	12		41	△
2N									9	14		23			1	2		3	83	20	15	11		129	△
2S													3		3	16		22		3	1	2		6	×
3N	3	0	4	12	1	20	1					1	1	2	1	13		17	16	17	55	16	1	105	○
3S	1	1	5	18	6	31			10	23		33		2	3	15	3	23	2	6	10	6		24	△
4N	7	3	62	76	18	166	6	11	26	82		128	2	1	11	28		42	17	11	47	34		109	○
4S	3	4	17	52	9	85							2	1	2	22	2	29	1	1	5			7	△
5N	1	13	35	130	16	195	1	1	4	6	3	13			1	7		8				2		2	○
5S			12	40	12	64							3	3	14	16		36							×
6N		2	10	36	5	53				1	1	1	4	5	22	63	3	97							○
6S	7	1	10	56	6	80									3	10		13							×
7S		6	8	30	27	71								1		6		7							×
合計	22	30	163	450	100	765	13	15	73	176	4	281	21	31	116	299	8	475	145	82	172	94	1	494	
				(その他10)						(その他12)						(その他10)						(その他13)			

総計		(内表採)	(内グリッド)	(左表合計)
土師器（古式）	217	(16)		201
〃（新）	172	(1)	(13)	158
〃（区分不明）	556	(24)	(8)	524
土師器合計	945	(41)	(21)	883
須恵器	1,150	(109)	(22)	1,019
陶器	127	(8)	(6)	113
その他	50	(5)	(−)	45
総計	2,272	(163)	(49)	2,060

○ 旧地山面の残っているもの
（旧表土、黒色土が残っているもの）
△ 旧地山面が深く削られたもの
（深い柱穴が残っている）
× （ほとんどの柱穴も残らない）

中から14%、地山面から23%、ピット内の落ち込みが24%である。しかし遺構面（地山面での）が完全に残っているのは１Ｎ・３Ｎ・４Ｎ・５Ｎ・６Ｎの各区である。またこれに対して地山面も既に削られていて全く遺構面の認められないのは０Ｎ・０Ｓ・２Ｓ５Ｓ・６Ｓ・７Ｎの各区であった。従って遺物出土数もこれに準じ、４Ｎ・１Ｎ・３Ｎ区が最も多く、削平を受けていた０Ｓ・０Ｎ・５Ｓ・６Ｓに少なかった。

また土器の新古については各区の間に本質な差異は認められず、ピット（中～小の柱穴が主である）内から採取した土器片は古式土師器や弥生式土器が多く、埋土や黒色土層中の場合とはその混在比率を異にする。このことは大半の柱穴についてその年代を暗に示していると考えられ、続き地である昭和60年度調査の０～１区と本質的に同じものといえよう。

グリッドNo.１～No.６を設けた谷地形奥部にあたる水田についてみると、狭く深い旧谷地形を埋め立てた水田であり、最下層は川砂礫である。埋土中には土器片の混入が認められる。山陰編年Ⅳ期又はその後の須恵器と新しい段階の土師器片であり、近世の陶磁器も若干含まれている。これらの遺物は東に近接する常楽寺遺跡方向から、開田に伴って削り出した土で埋め立てたものとみられ、そこに存在した遺物が混入しているとみてよかろう。

２）弥生式土器（図９）

（１）～（５）は甕形土器の口縁部片で、いずれも複合口縁は短く直立気味で、外面に凹線を明瞭にめぐらせ、下端は上方又は横へくり上げて尖らせるものである。肩～胴部等の破片が見当らず、器形については不明である。胎土には砂粒を含むものが多い。（１）は口縁がやや開き気味に短く立ち上り、外面に４条の櫛描線文をめぐらせている。（２）は強く短く外反する口縁の端部を肥厚し、複合口縁にはなっていない。外周はなで仕上げで沈線等は施されていない。広口の器形である。（３）は口縁がやや内傾気味に短く立ち上り、外周に５条の沈線をめぐらせる。小形品。（４）は短く直立する口縁で、上端と下端に各１条の沈線を施している。（５）も（４）にほぼ近い形と思われるが、口唇部分ては不明である。内面頸部以下は削り放しである。

（６）～(10)は底部の破片である。（６）はわずかに平底の残る器で小形甕とみられる。（７）は外面に縦方向の刷毛目が認められる大型の壺かと思われるもの。（８）は底面を凹ませたもので、指頭削りの手法がみられる。此は縄文後～晩期に属するものかもしれないが一応ここに掲げておく。（９）はしっかりした平底で、内面削り放し、外面に縦の刷毛目が残る。焼成も良い。(10)も（９）に近い製作であるが、風化が著しい。このように（８）の凹底のほかはすべて明瞭な平底であり、弥生時代後期の所産である。なお、（３）

(7)～(10)は遺構XVIIの柱穴ピットから採取したものであり、他は黒色土中に混在したもののである。

3）古式土師器（図9）

(11)～(20)は古式土師器の複合口縁部分である。胎土は砂粒の多いものや緻密なもの等種々である。(11)はわずかに外反する口縁部分で内面はあまり強く屈曲しない。外周に3条の鈍い沈線がめぐる。(12)は(11)に近い断面形態のものとみられるが、口唇部を欠く。外周には沈線がわずかに認められる。(4)もほぼ上記に近いものでやはり外周に目の細かい櫛描線文が施されている。これらは口縁下端が下向きに尖る。(13)は複合口縁部が外反りで、頸部内面の稜をならしてなで仕上げとしている。外周には明瞭な櫛描線文が施されている。外面には煤の付着が認められる。(14)は口縁外面が直立気味で浅く細かい沈線をめぐらせる。下端は同様に横につき出す形状となっている。内面はアクセントがなく湾曲しながら下降する厚手の口縁である。(15)も厚手で内面頸部以下は削り放しである。やや幅広い複合口縁はわずかに認められる細かい刷毛目状の線文があり、下端は上向きに尖る。(16)は櫛描横線をめぐらせる薄手で外反りの口縁で、内面にアク

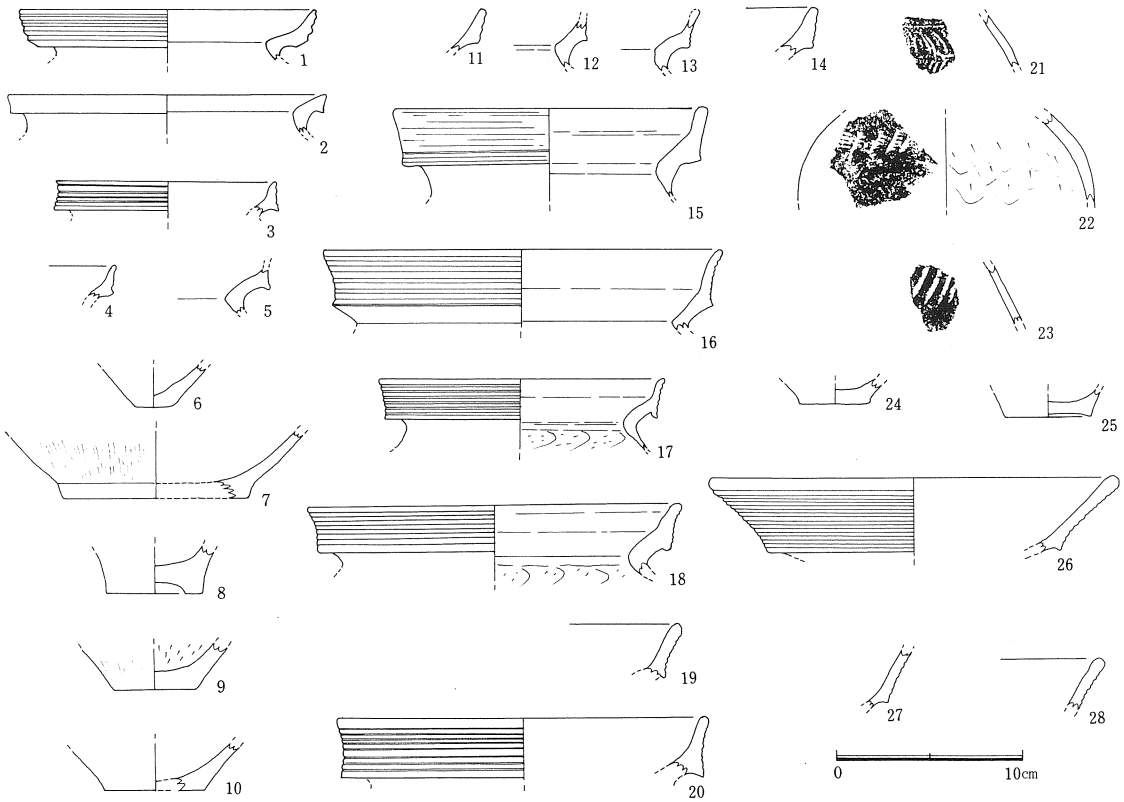


図9. 弥生・古式土師器

セントがある。口縁下端はほぼ横に尖る。(17)～(20)は口縁外面が幅広くなり、６～８条の櫛描横線を施し、薄手の外反りである。内面頸部以下は削り放しとしている。口唇はほぼ丸く収める。

胴部の破片は判断できない細片が多く、ここには肩に施文された３点を示すに止める。(21)は薄手で内面は削り放し、やや小形の甕形土器で、上下の線で区画された施文帯があり、２段の対行する二枚貝の刺突とみられる弧状連続文が施されたもの。施文用の貝は中の密な二枚貝かと思われる。類似する施文は稀れで県内では例えば日焼田１号住居址出土が挙げられる程度である。(22)は同様に二枚貝（フネガイ科か）の押し引きによるノ字文をめぐらせるもの。近隣地帯に多くみられる施文様式である。やはり小形で内面は削り放し、薄手で焼成の良いものである。(23)は同趣の施文であるが、ヘラ状工具によるノ字文としている。内面は同様に削り放し、曲率からして大形品の肩部と思われる。

(24)・(25)は底部の破片である。(24)はややラフな整形で指頭で削り下げている。底面も整形でない。内面の一部に削りが認められる。胎土は緻密で焼成も良い。壺又は甕形土器と思われるので一応ここに記載したもの。(25)は丁寧になで仕上げした凹底気味の大径のものである。焼成も良く、淡橙色で堅い。胴部は薄手のようである。

(26)～(28)は鼓形器台で、いずれも受け部の破片である。中筒部が不明であるが、あまり高さのつまるものではないようだ。大まかに鍵尾式平行と考えたい。

以上の古式土師器片には煤の付着するものが多くみられ、煮焚き用の器に用いたものがかなりあると思われる。

なおこのうち２Ｎ区の特異遺構XVIIのP40・P41の各柱穴からの出土物は、(13)(15)～(19)(21)(23)(27)(28)であり、遺構XVIIの時期を示す重要な資料といえよう。

４）歴史時代の土師器（図10）

（１）（２）は単純に短く開く口縁の甕形土器で、粗砂粒を多く含むやや粗製のもの。内面頸部以下は削り放し、外面は横なでである。

（３）は低脚坏であるが坏部や脚端については形状が不明である。胎土は緻密であるが焼成は弱く、淡黄橙色を呈する。坏内面、器外面ともになで仕上げである。

（４）はやや頸部の長い脚坏である。坏中心部分はほぼ平坦であることから大形のものとみられる。焼成は良く、色・胎土については（３）とほぼ同じである。

（６）はは脚坏又は高坏の坏身部分で薄手であり、ロクロ整形の鈍い稜を残すものある。焼成は弱い。（５）は深みのある坏身～口縁部分で、埦又は有脚なのかは不明。内面には丹彩が認められる。

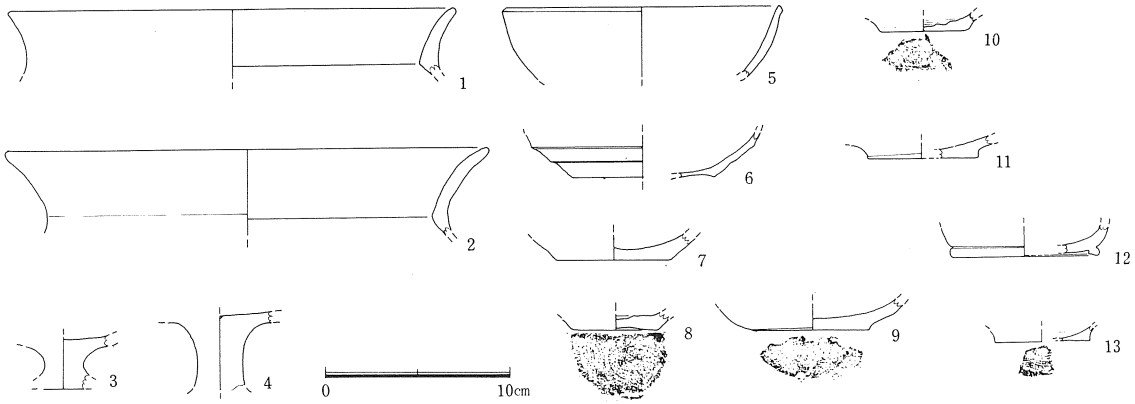


図10.　歴史時代の土師器

(7)は坏状又は皿と思われる器の平底部分で、底面は回転糸切りが明瞭に認められる。(9)(11)もほぼ同様である。(11)は焼成が弱い。(8)(10)は焼成の悪い小坏の底部で、底面はいずれも回転糸切り、内面はロクロ整形痕の明らかなものである。(13)は土師質土器（瓦器）で製作形状は(8)(10)に近いと思われるもの。薄手で焼成良く堅い。明るいレンガ色である。

(12)は器体部が立つ深い皿形のもので、外縁に近くややふんばり気味の低い高台が付く。高台裏も丁寧になでている。焼成も良く堅い。

以上の土師質土器は大まかに8～9世紀ごろとみなされるものが主であり、概ね地山に近い位置から、又は柱穴ピットの中から採取したものである。

5）須恵器

須恵器の破片が調査区域のほぼ全域から、しかも各土層ともに包含混在していた。量的にみても土師系に比してかなり多く出土している。特徴のあるもの、器形のうかがわれるものについて概観する。

(1)は瓿の強く開いて立ち上る頸～口縁部の破片である。頸部から口縁部へ移る位置に鈍い1条の稜があり、その下方は櫛描波文を施す。波形はややすぐれている。

(2)は直立気味に高く上る直口縁部分で壺かと思われるが器形は不明である。ロクロくり上げの痕跡が明らかである。(1)(2)ともに胎土中に黒色の細結晶質のものが含まれている。

(3)(4)は高坏の脚部で、(3)は脚端が欠けており不明である。またこれにはヘラ切り線となった透し孔が認められ、(4)より古い段階とみられる。胎土には(1)(2)と同様に黒色の細かい結晶質のものが含まれていて、同じ製作かと思われるものである。

(5)～(8)は蓋坏の坏身で、受け部の立ち上りが強く内傾し、それぞれ順次退化してゆく過程のものである。いずれも破片であり底部の調整は不明であるが、(5)(6)は立

ち上りも整形であり、山陰での編年のⅢ期に入るものであるが、(8)は器径も小さく立ち上り部の消失する直前の様相で明らかに後の段階に入るものである。

(9)～(16)は蓋である。(9)(10)はそれまでの坏身と蓋の逆転した段階のかえりの付くものである。つまみ部は欠失して不明である。(12)は天井部がわずかに凹むが、回転糸切りのままで、おそらく宝珠形のつまみであったと思われるもの。(11)(13)は上縁端が下方へ折れて尖るもの。(14)は口縁端が下方内傾気味に折曲して合口とした製作で、さらに後出するものである。(15)(16)は輪状つまみの部分で、(15)は大きく低く、(16)は小径で立つ姿のものであるが蓋の全形状は不明である。

以上のうち(1)(5)(6)は古墳時代後期の所産であるが、(3)(7)(8)は古墳時代末期(7世紀初)であり、(9)(10)は7世紀中ごろ、(11)～(14)は7世紀末～8世紀初頭の様相とみられる。

(17)～(38)は底部に高台の付く器である。(17)は強く開くしっかりした高台で裏は全面が丁寧になで仕上げとしていて、この一群中では古相を示している。(18)～(21)はしっかりしたやや開き気味の高台の付くもので、高台裏はヘラ又は指でなでている。(22)～(24)は高台の端部を外方に向って斜めに削っているもので、回転糸切りのまま(22)やヘラ調整(23)が認められる。(25)～(28)はやや高台が低くなるが、裏面をなで仕上げとしたもの(25)(28)があり、焼成はやや酸化的で白っぽい色調である。(29)～(33)は極く低い高台のつく一群で、裏面調整はなでたもの(29)(31)、ヘラによるもの(33)等が認められる。焼成は同様にやや酸化的で灰白色傾向である。(34)(35)は回転糸切りで灰白色に近い色調のものである。(36)は内面赤灰色・外面青灰色の焼成方法を異にするもののようで、底面にヘラ痕が強く印されている。(37)(38)は高台端(接地面)にわずかの凹み線をなす手法があり、ほとんど酸化的焼成で赤色(37)又は白色(38)を呈し白瓷と呼ぶ一群に区分される。

このように高台の付く坏器では(17)が最も古く7世紀前半とみられ、(18)～(24)は大まかに7世紀後半～8世紀前半ごろ、(25)～(35)は8世紀末まで、(36)～(38)はさらにこれより降るものと思われる。

(39)～(47)は高台の付かない平底の部分である。(39)(40)はやや深みのある坏で、底面は回転糸切りののちなで仕上げとしたもの。(41)～(43)は大形で壺かと思われる器の底部であり、いずれも回転糸切りのままである。(44)は小さい壺、(45)は坏かと思われるが、これも底部は糸切り痕が明瞭である。(46)(47)は陶質で黄橙～黄灰色を呈し、わずかに砂粒を含む胎土を用いている。おそらく大形の甕又は壺形のものであろう。(46)は外面底面ともに削り放し、(47)は削りのちなで仕上げとしている。

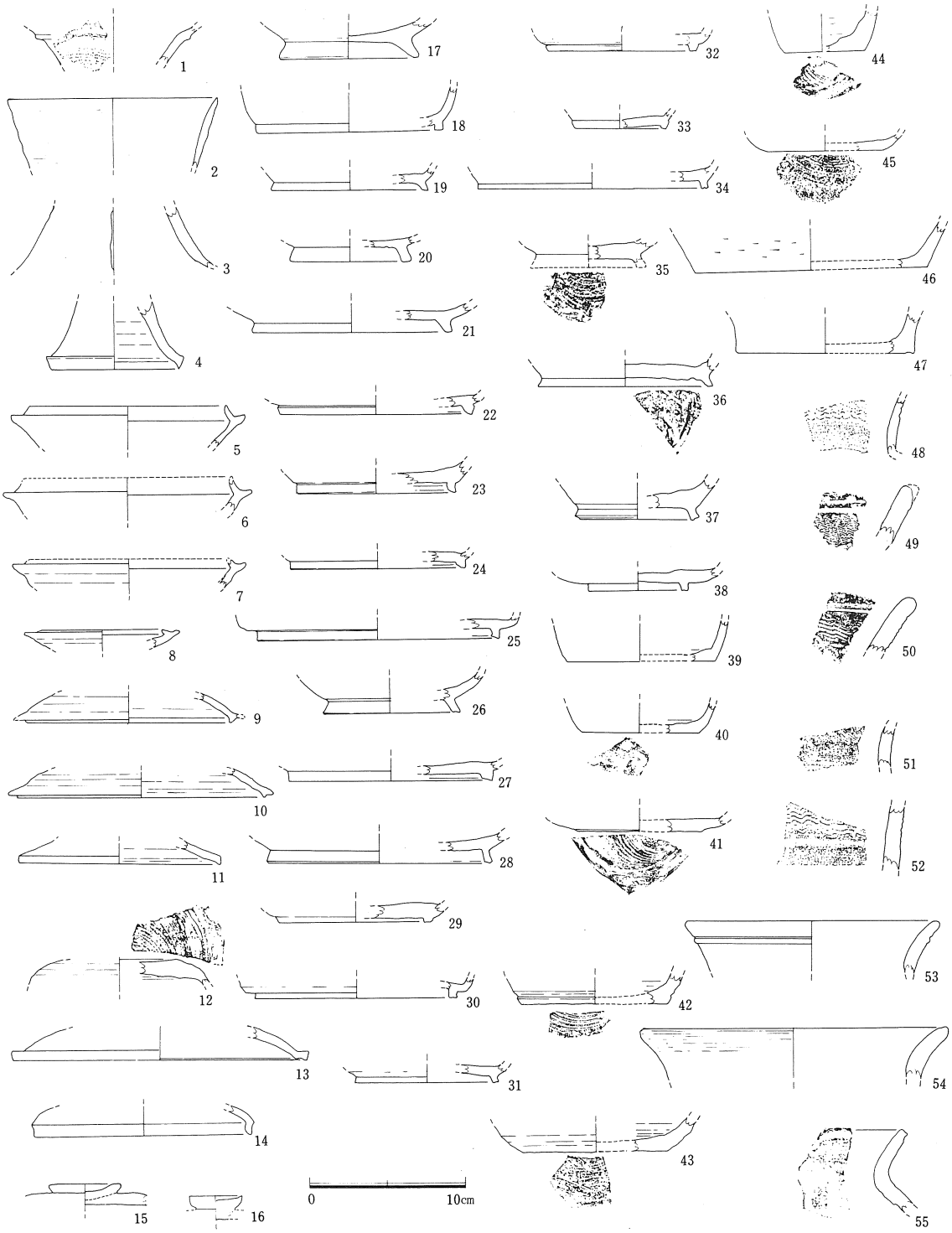

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
0
10cm

図11. 須 恵 器 (1)

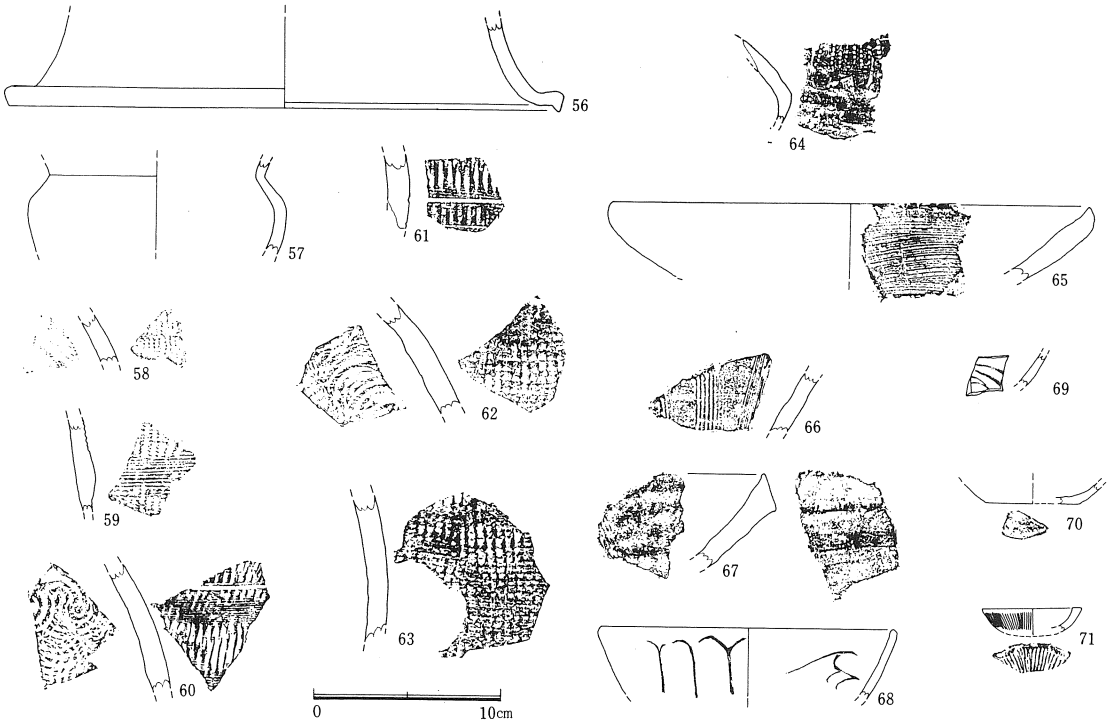


図11. 須 恵 器 (2)

底部の製作等から、(39)(40)のなで仕上げとしたものはやや古くて8世紀ごろ、(41)～(45)はそれに続くものでおよそ9世紀ごろであろう。(46)(47)は中世の陶器である。

(48)～(52)は櫛描波文の施文された破片を集めたもので、(48)は聰頸部、その他はいずれも器壁は厚く甕の頸部である。これらは波文の描き方がラフであり振幅が弱いことから8～9世紀ごろのものと思われる。但し(48)のみは7世紀前半であろう。

(53)は単純に短く開く大壺の口縁部で、隆線を1条めぐらせるほかには施文はない。灰白色で陶質である。時代が降って中世に近いものかもしれない。

(54)も同様の製作であるが、口縁端にハケ目が残る。焼成は良く自然釉が付く。8世紀ごろであろうか。

(55)は短く「く」字形に開く壺の口縁～肩部で、口縁端にヘラ押しの凹線が1条めぐる。肩部には口縁を圧着する際の叩き目がなで消しされて認められる。

(56)は直径30cmを測る。大形の高坏脚部である。昨年度の調査にも1点あったが、同様に内外とも回転なで、脚端は下方へ折り曲げてかかり様に尖らせている。透し孔は認められない。

(57)は小形の壺とみられるが、口唇と下半部分を欠く。焼成はやや酸化的で灰白色を呈し堅い。内外面ともなで仕上げであり白瓷系のものである。

(58)～(63)はいずれも大形の甕体胴部の破片であり、外面には目の粗い叩き目が著し

く、さらに回転する掻き目がある。(60)(61)は叩き目が線状をなす。内面についてみると(59)(63)は叩き目を磨消しているが、その外は円形の叩き目のままである。この磨消したものは器種によるものかと思われ、時代の古相とは一致しないだろう。

(64)は肩部に張りのある壺形のもので、肩部にはなで仕上げの後、櫛状工具による雨だれ状の刺突文をめぐらせる特殊なものである。焼成は酸化物で外面灰白色、内面はやや赤味を帯びる。時代は不明。

(65)は直径26cmの浅鉢様の器で、外面は削った粗面であるが内面は横方向に櫛描の深く鋭い線刻目となっている。擂鉢の一種でもあろうか。灰白色の陶器である。

(66)(67)は擂鉢片で、6条を単位とする櫛描き目を入れている。外面は荒くヨコなで、口縁端は厚くしている。(66)は須恵質、(67)は古備前焼である。

(65)(66)(67)はおおまかに平安～鎌倉期とみてよかろう。

(68)(69)は青磁でやや緑がかった色調である。(68)は碗で内面は忍冬文、外面は単蓮弁文があり、貫入は認められない。(69)は内面に曲線をなす文様があるが、破片が小さくモチーフは不明。細かく貫入が認められる。いずれも渡来物であろう。

(70)は外面無釉、内面は厚く鉄釉のかかるもので、形状は不明である。底面は回転糸切りとなっている。古瀬戸であろうか。

(71)は直径5.4cmの磁器小皿で白色である。外面は放射状に深い縦掻き目で、口縁は鋭く平坦である。中～近世の紅皿である。

6）その他（図12）

(1)は半透明赤褐色のメノウを用いた石器で、荒く打ち欠きした製作である。刃器でおおまかに縄文時代かと思われる。遺構XVIIの柱穴から採取したものである。

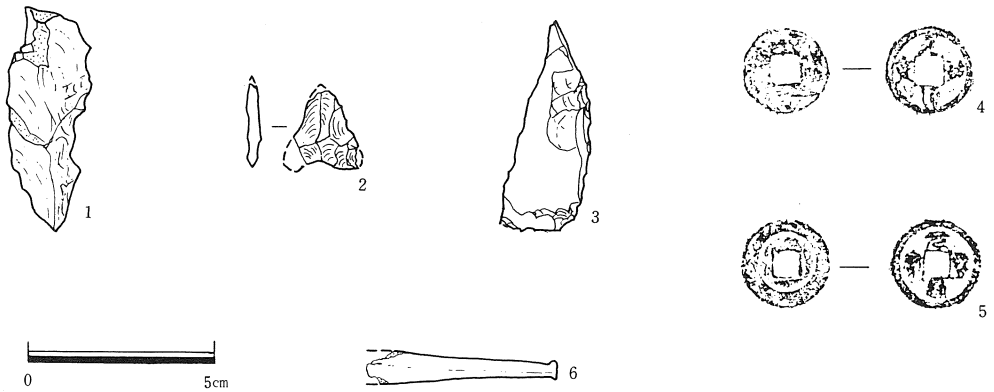


図12. その他の遺物

(2)は純黒色の黒曜石製で抉りの浅い石鏃。製作はやや入念である。4N区の柱穴P42Bに落ち込んでいたもの。

(3)玄武岩を打ちはぎ製作した尖頭器様のもの。4S区の地山面近くに採取。

この3点の石器はその製作からしていずれも縄文時代(後期か?)のものと思われる。

(4)(5)は宗銭である。(4)は元祐通宝(宗1086年)、(5)は元豊通宝(元1078年)で、いずれも中世全期間通用したものであり、この品は踏み返し製品である可能性もある。

(6)はキセルの吸口部で、6S区の埋土中から採取したもの。銅薄板製である。吸口端を太くするところから江戸時代後～末期のものかと思われる。

5. 小結

本年度の庭反Ⅱ遺跡調査は昨年度調査地点の地続きで、全掘部分と南西一段低い谷地形水田部分にはグリッドを設けて調査を行った。南東の高レベル水田部分は開田に伴う削平で遺構面は消滅していたが、北西側谷地形寄りの部分には中～小の柱穴が多数認められ、堀立建物のプランク棟、柱穴列プラン6列は昨年度調査区からの続き号数である。Ⅵ～ⅩⅦを付した。このうちⅩⅦは特異なもので一応建物としておく。

柱穴に落ち込んだ遺物からみてⅩⅦのみが古く、古墳時代前期の所産とみられる。その外のプランは明確にし難いが柱間は1.8～2.1mのものが多く、2×2間又は2×3間のプランでほとんどが今日の磁北線に近い方向線に拠っている。出土遺物は攪乱された旧表土中に包含しておりその散布状況からすると奈良時代から平安時代前半が主であり、昨年度調査した北東部分の新しい段階が主体となすものと判断される。出土した遺物は若干の石器が縄文時代と思われるほかは、ほとんどが8世紀を中心とする限られた時期のものである。中～近世の遺物も数点みられたが、これらは埋土中に含まれていたもので、中～近世において数次にわたって開田や田区改良を行った際に削り出した土中に混っており谷地形部分を埋め上げていた。

付近には昭和56年に調査された常楽寺遺跡があり、これと一連の内容を有するものであった。従って大字常楽寺から大字三部へかけての一連の台地上は、古墳時代後期以降平安時代にかけてかなりの集落が存在したものと推察される。また出雲国風土記によるとこのあたりは滑狭郷のほぼ中心地域であったとみられ、石見国へ通ずる正面道の通っていた位置にもあたることも参考となるものである。

B. 狩山地区

庭反Ⅱ遺跡の南西にあたる丘陵端部の小字地名が「狩山」である。

調査はその開発予定である東端部の極く一部分のみで、崖上約3mに位置する丘陵突端部から1段下った帯状の狭いテラス状の茶畑の部分である。

地形に平行及び直交するトレンチによって土層の状況をみると、地山面は凹凸が著しく、前方へ強く傾斜下降する。この地山の上に地山塊の混った埋土があり、表層が耕作土となっていて茶樹が植栽されている。(図13)

耕作土の下面から明治8年銘の一銭銅貨（図13）が採取されたほかには何らの遺物も検出し得なかった。このことからして調査地点である畑地の開拓は明治初年ごろと考えられる。

このように調査地点に限っては何らの遺構・遺物は検出されなかったが、さらに西寄り高位置にある畑地部分（「土居」屋敷地の裏手にあたる）には、地形からして中世の遺跡の存在が予想されるところである。

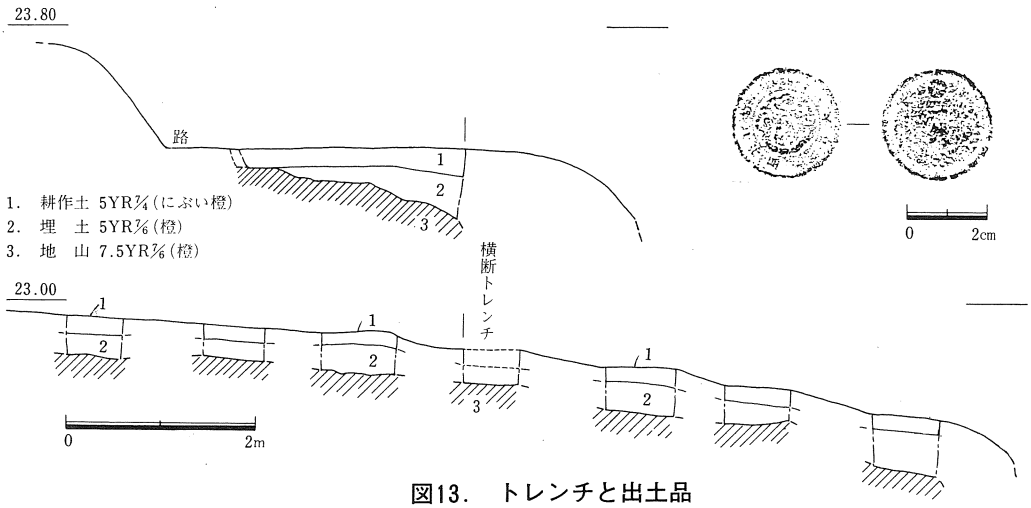


図13. トレンチと出土品

C. 馬場地区

1. 発掘状況（図14）

狩山に続く南側山麓部の起伏する低丘陵部分で、西蓮寺の西隣り地続きの一帯である。このうち調査の対象としたのは谷地形の部分が主で、もの畑地に拓いたところである。調査は東寄り一段高い平担面を含めて直交するトレンチとグリッド6か所設けて行った。

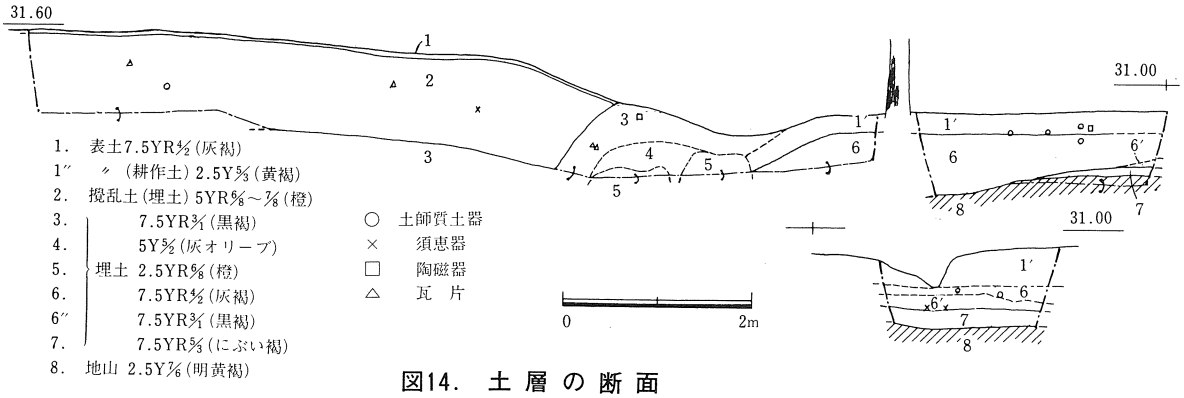


図14. 土 層 の 断 面

深さ30～60cmの埋め土を行って畑地にしたもので、谷地形を残しながら4段の段畑である。このうち谷奥の2段の畑地では埋土中（グリッド№1～4）には新しい段階の土師器（丹塗りも含む）や須恵器等の細かい砕かれた破片が混入していたが、その下の地山面には遺構面は認められなかった。

埋めたてた土は谷の右手北西側丘陵部を削り出したものとみられ、削ったところもまたその土で埋めた谷部もともに畑地として開拓したものである。

包含していた遺物からみて丘陵上には住居址等があったものと思われるが、開畑によって遺構は失われている。

調査区の南東部にあたる西蓮寺続きの山裾平担面は、極く近年に重機によって削平された畑地で、谷寄り部分では1.8m以上にも及ぶ埋めたてが行われており、この撹乱された埋土中には近～現代の陶磁片が数点認められたが、その他には何らの遺物遺構等は検出されなかった。

2. 遺物

1） 土師器（図15）

（1）（2）は大形の甕で、単純にく字に短く開く口縁部分である。（1）は外画と口縁内側をヨコにハケ目とし、内面頸部はタテハケ目に調整している。口縁端は丸くなでて収める手法。胎土に細砂粒が多く、焼成が良い。口径32cmの大形品である。（2）もほぼ同様であるが口縁部は反りをもたせ口唇をやや厚くして丸く収める。なで仕上げで内面頸部以下は削り放しとみられる。やはり胎土に砂粒を多く含む、焼成は良い。

（3）～（5）は同趣の口縁部片で、特に（3）（4）は逆L字形に短く横に突き出す口縁の造りであり、内面頸部以下は削り放しとしている。これは上記より後出するものである。胎土にはいずれも細砂粒を多く含み、焼成は良い。

（6）（7）は薄手で器形は盤状をなすもの。胎土は緻密で水簸したものと思われる。内

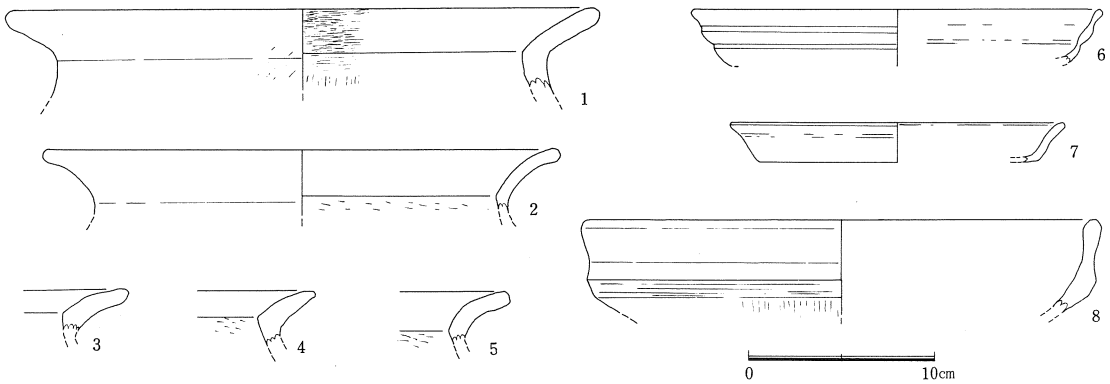


図15. 出土遺物(1)

外面ともに丹彩されていて特別の用途が伺がわれるものである。(6)はヘラで押さえて製作したと考えられる2段の鈍い凹線がめぐる。口縁端はいずれも外反気味とし丸く収める。入念な製作である。8世紀以降かと思われる。

(8)は口径28cmを測るやや厚手の器で、胴部には煤が付着している。土鍋であろう。底は椀形で体部は直立し、口唇を厚くして丸く収めるもの。体部と以下との界にはヘラ削りとみられる界圏帯を造っている。時期的には後出するものであろう。

2) 須恵器(図16)

(1)(2)は甕である。(1)は外反しながら立ち上る頸部で、上2条下1条の界線に区切られた施文帯にハケ目工具様のものでノ字形に刺突文を施している。これは櫛描波文の退化したものである。灰白色気味で厚手の造りである。(2)は底部で、外面はロクロ削りのまま。底面の丸みがほとんど失われ、平底に近くなったものである。胴内面は強くヨコなで、底は荒く掻きとりとしている。奈良時代とみられる。

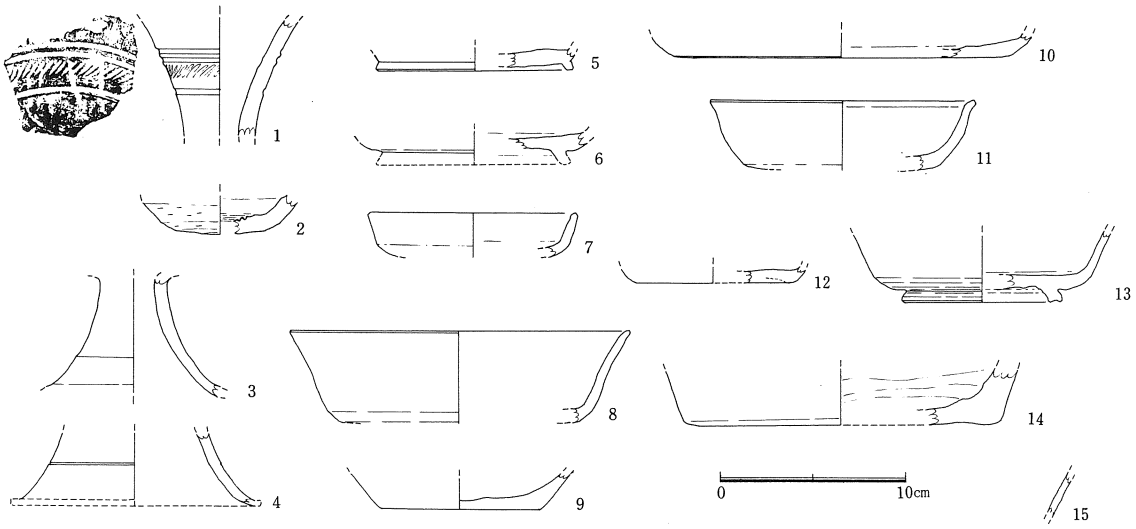


図16. 出土遺物(2)

（3）は透し孔のない高坏の脚部で、ロクロ整形。（4）もほぼ同様であるが脚下方に界線1条がめぐっている。この胎土には微細な黒色結晶片を多く含んでいる。（3）（4）ともに脚端部を欠く。やはり奈良時代とみられるもの。

（5）（6）は高台の付く坏である。いずれも底部外縁に近く低い高台を付ける。（5）は底面がヘラ切りのちなで仕上げ、（6）は回転糸切りのままである。いずれも焼成は良く、淡い青灰色を呈する。

（7）（8）（11）は平底の坏で、直線的に立ち上る口縁はその端部でわずかに外反り気味となり、丸く収める。内外面ともに回転なで、底面は回転糸切り（7、11）である。（7（7）（8）は焼成良く、（11）はやや不良で黄白色を呈している。

（9）は壺と思われるものの底部で内外面ともに回転なで、底面は指でヨコに強くなでている。緑がかった灰色で焼成は弱い。

（10）は大型の皿形をなすもので薄手であり、内外ともヨコなで、底面は静止糸切りである。胎土は緻密であるが焼成は弱く赤味を帯びる。

（12）は小型の坏で内外面とも回転なでで、底面に足し土した接合部もあり、粗製品である。酸化的焼成でほとんど白色であり白瓷に属する。

（13）は高台の付く坏で、高台は強くふんばり下端は凹線状に中凹みとしている。また高台裏の接合部は強く押圧してなで仕上げである。体部内面ともに回転なで、焼成良く、青灰色を呈する。平安期のものとみられる。

（14）は大型甕の底部片で、外側面は回転なで、内面は指頭で削るように不整形ななでである。底面もやや不整で粗くなでかと見られるもの。外面には薄く自然釉が付き、常滑系の古窯かと思われる。

（15）は薄手の青磁片で、器面には貫入があり、印花文を施すが、小片でありモチーフは不明、深緑灰色を呈す。

このように馬場地区の出土品は攪乱された旧表土中に包含し、特に谷奥部からの出土が目立つ。内容的には奈良～平安期が主であり、わずかに中～近世のものがみられる。

D. 高丸地区

試掘状況（図17）

高丸地区は庭反から狩山・馬場の各地区を経てさらに南西の山地へ登ったところにあり、大まかに大字常楽寺や三部の後背地山塊部分にあたる。調査地点である狭小な最頂部とその北東下方地下り一帯は中世の城砦があったと伝えられる一画で、遺跡地図にも記載され

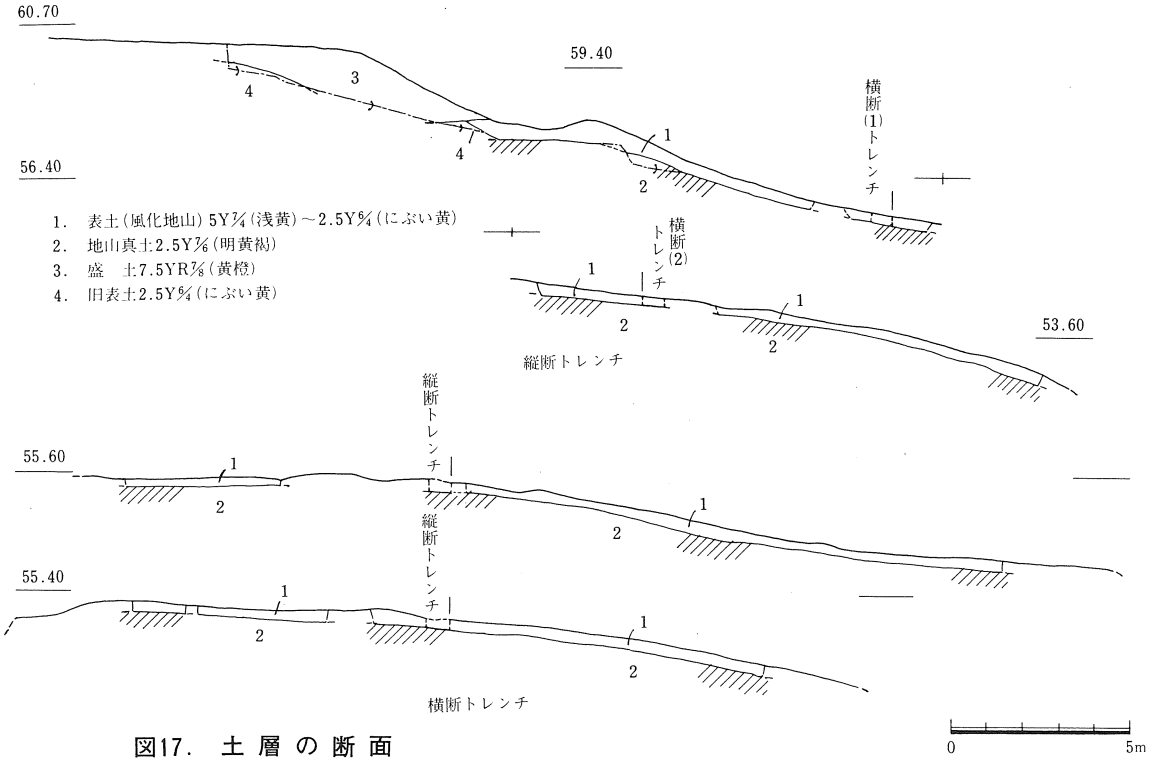


図17. 土 層 の 断 面

るなど周知されている所である。昨年度の踏査でもその可能性があると指摘した地点である。

試掘調査は頂部から北東へ下降する縦断トレンチとそれに直交する2本の横断トレンチによって観察することとした。

最頂部の削平面は削り出して整地したもので、近隣の人の言によると近代に整地したとのことで旧状については明確な状況は聞きとれなかった。トレンチ断面についてみると、旧状はさらに狭いものと思われ、城郭とみるのは困難であるが、物見程度のものであったかもしれない。また最頂部直下のアクセントのある地形は、表土を部分的に押しつけ盛り上げた部分であると判断され、さらに下方のフラットな面も縦断面・横断面ともに地山上にほぼ均等な厚さの表土が被っている状況であり、自然地形のままであると判断した。

さらに付近の踏査も含めて総括的にみると、この高丸地区には明確に城郭と断定する資料は得られず、城跡とは言い難い。おそらく自然地形を利用した一時的な物見でもあったのであろうか。

E. 西蓮寺山古墳群

庭反遺跡を北方眼下にする西蓮寺の直裏の丘陵上に２基の古墳と覚ぼしきマウンドを認めた。

施工区域はこのマウンドの一隅をかすめるように計画されていることから、二つの墳丘を通してのトレンチを設けて確認をはかった。

屋根を横断する掘り溝で区画して一辺15m、高さ2.5mの方墳が２基連続して設けられていた。低位北側から１号墳、２号墳とよんで記述する。

トレンチでの観察によると１号墳は丘陵尾根の自然地形を削り出し、わずかに盛り土して整形したものである。１号墳の北側は下ってゆく尾根を削平して墳裾を区画している。２号墳も同様は造営方法で、南側の尾根との間は約１ｍの深さの溝で切断し、１号墳との間も同様に溝で区分している。２号墳頂の標高は54.40mで１号墳頂の52.45mより約2.0m高い。また１号墳頂はその前面の削平部分より約2.5m高い。

トレンチ調査の限りでは溝中や墳丘斜面等から遺物は全く検出し得なかった。

２号墳頂部のトレンチ面では、幅50～70cm、長さ230cmの落ち込みがあるのを認め、主体部と思われたがそれ以上の発掘は行なっていないので明確ではない。１号墳では落ち込みの確認ができなかった。このことから２号墳は落ち込みの認められた部分がほぼ中心にあ

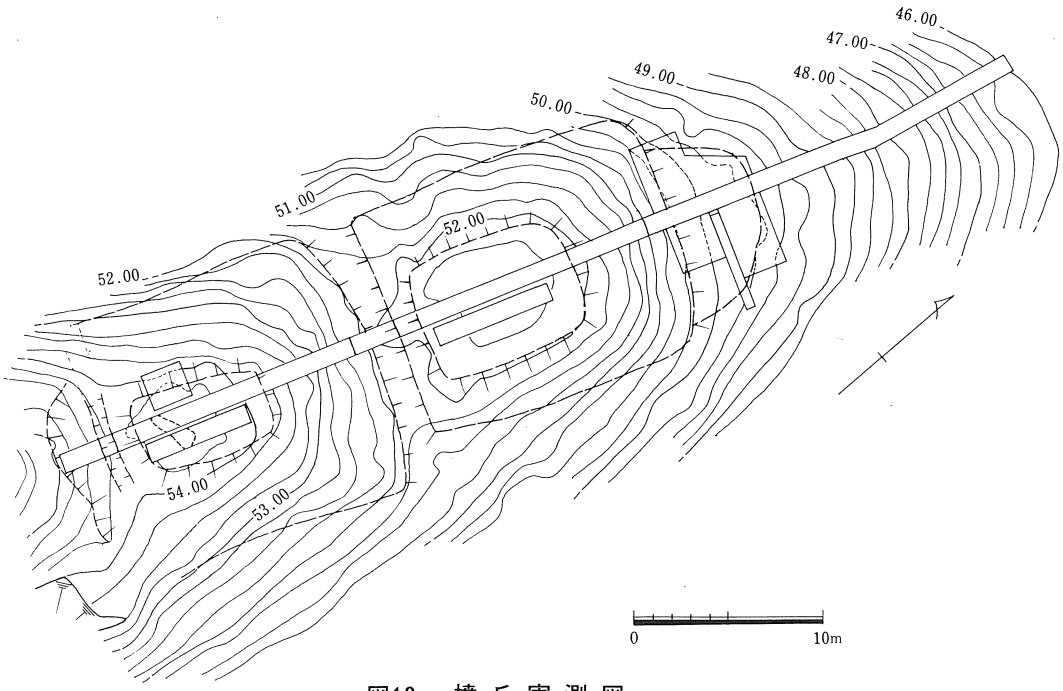


図18. 墳丘実測図

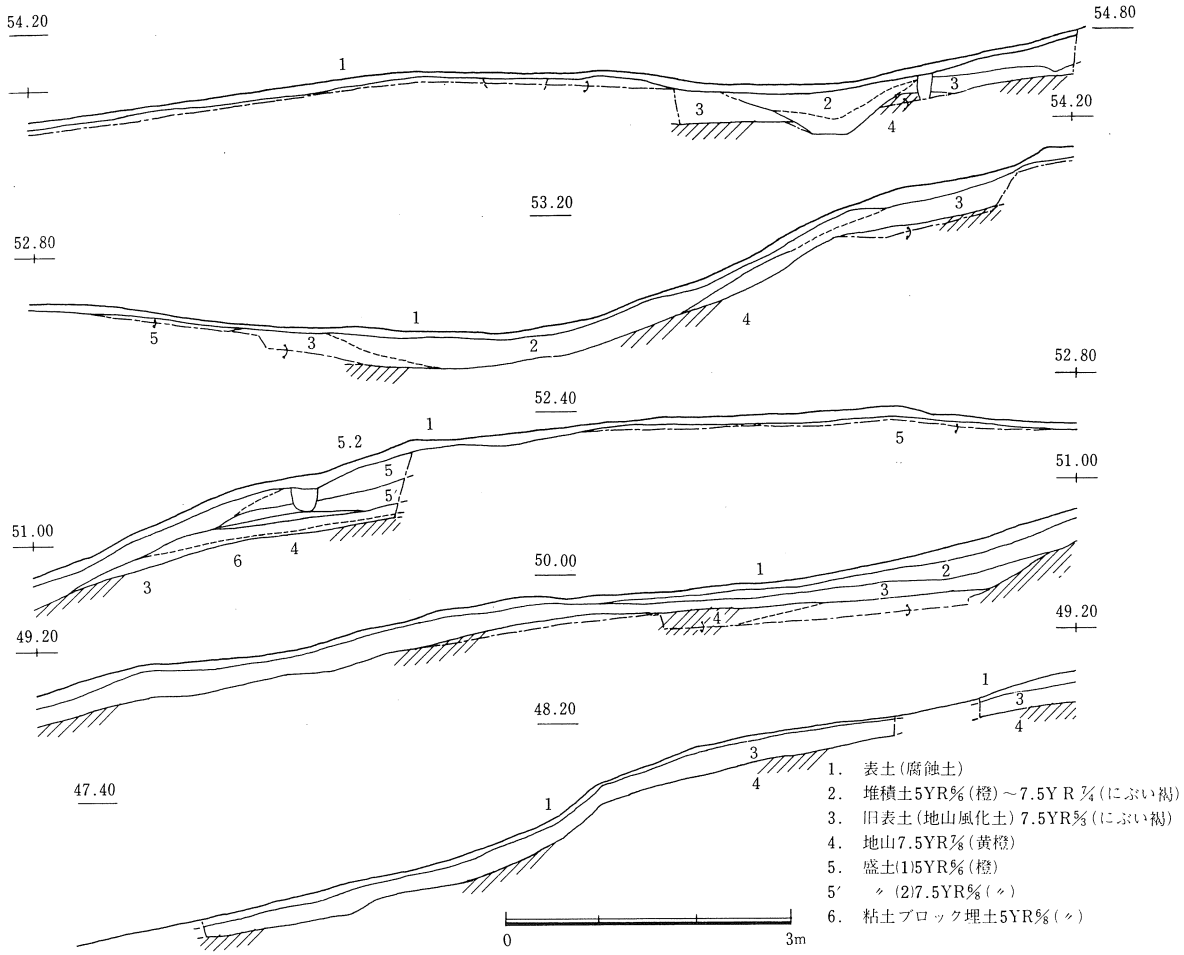


図19. 試掘断面図

ることから主体部は1基のみであると思われる。

出土遺物が全くないのでこの古墳の時期を特定することはできないが、大まかに古墳時代前～中期ごろの造営と思われる。

(杉原清一)

Ⅳ. まとめ

昨年度に続いて調査を行った庭反Ⅱ遺跡と、それに続く南方の山手にかけての縦断する帯状地帯についての分布調査を行った。このそれぞれの様相やその相互関連について若干の所見を記してまとめとする。

— 庭反Ⅱ遺跡について —

地山面に多数の柱穴が重複しながら穿たれており、その上を覆う旧表土は攪乱されていたが、細片となった土器片をかなり多く包含している。検出した柱穴は多数であるが、その中で堀立建物5棟分と柱列をなすプラン7を認めた。さらに並行する浅い溝の中に柱穴状ピットの並ぶ特異な建造物遺構（遺構XVII）も検出した。

堀立建物の時期を明確にする直接資料は欠くが、出土する遺物の大部分が大まかに奈良時代を中心として限定されることから、建物や柱列プランはいずれもこの範囲に入るものと思われる。但し特異なものである遺構XVIIは、ピット内落ち込みの遺物がすべて古式土師器かそれ以前のものであって、古墳時代後期以降のものを含まないことから、建物遺構より古墳時代前半であると考える。遺構XVIIはかつての入海の岸に面して、ほとんど北方向であたかも土台を2本並行に据えたと思われるような浅い溝内から各3か所の深いピットが穿たれていることから、単なる堀立建物ではないと考えられる。何らか例えば、海事か祈祷に関与する高く太い柱の建造物であったのかもしれない。

昨年度調査区域も含めて庭反Ⅱ遺跡では、弥生時代後期から中世に至るまでの長期に亘る遺物が見られるが、就中弥生時代終末期とされる九重式～古墳時代前期と奈良時代にあたる遺物が主であり、堀立建物遺構は主として後者に属するものと考える。

これらの様相は東700mに位置する町営住宅の建設に先だち、昭和56年に行われた常楽寺遺跡発掘調査の成果とほぼ同一の内容であり、この二遺跡間の広い台地上は一帯に同一であると考えてよかろう。

— 狩山・馬場地区 —

狩山・馬場地区は庭反Ⅱ遺跡に接続する南側の一段高い丘麓部で、その支丘上には濃密ではないが奈良時代以降の遺跡があったとみられ、削り出した土中に遺物が包含されている。そしてこのあたりは現代に至るまで居住地区として集落を形成している。またこのレベル帯には「土居」「垣内」等、中世に由来すると考えられる地名も散在していることもあり、遺構は検出できなかったものと思われる。

— 西蓮寺山古墳群 —

西蓮寺裏の丘陵ではその端部に方墳2基を確認した。発掘は行っていないのでその内容

については未詳であるが、墳頂に立てば北方眼下に常楽寺～庭反の台地上の水田が、さらにその下にはかつて神門水海であった干拓田が一望される。ここに小規模ながら、一辺約15mの方墳を営むのは庭反Ⅱ遺跡の人々にとって格構なところといえよう。

— 高丸地区 —

さらに南方の山塊地帯にあたる高丸地区は、地元の伝承で城砦であるとされ、その狭小な最頂削平面にはかつて小祠等が祀られていた。

その下段である北方に下る緩斜地形について試掘を行ったが、頂部の削平も極く近年に再度工作されており、また下方斜面については人工の痕跡も見出せなかった。この結果から直ちに城砦の存在を全く否定するものではない。極く簡易な或は臨時的な物見砦等では、自然地形を加工することなくそのまま流用する場合もあり得るであろう。

この遺跡の付近一帯は近隣には稀れなやや広い台地状地形であり、南側後背部にはやや急峻な丘陵であり、前方北側はかつての神門水海の奥まったところにあたる。この台地上には既に数多くの遺跡が知られており、丘陵上の古墳をはじめ台地上には居住に関わるものがあり、また地質時代とされる獣骨（付編図版参照）や硅化木など多彩なものがある。しかしそれらは偶然発見によるものが多く、また今日ではその遺物も大半が所在や出土が不明となっているなどで、遺跡の内容としては必ずしも明確ではない。

今回の調査は狭長な区域について行ったのにもかかわらず、多数の建物プランと遺物のあり方を確認した。そして古代の比較的大きな集落の一端であると判断されたことと、さらにその後背丘陵上に位置する古墳群との関連が深いものと思われるなどの事項は、今後において近隣の遺跡を含む一帯の歴史を解明する上で重要な資料となるものであろう。

「出雲国風土記」ではこのあたりは滑狭郷であり、その郷庁は今の出雲市神西中組あたりにあったとみられているので、今回の調査地点からは極めて近い位置となる。また同書記載するところの石見国への通道（かよひぢ）は正西道としてこの地を通過している。

また天平11年（739）賑給帳にみえる姓氏からすると、6世紀後半から出雲西部域に大きな勢力を有した〝神戸臣〟の本拠地は日置郷・滑狭郷であったとみられるなど、西出雲の主要地帯に属する地域といえよう。

出土遺物もこれらの時期にほぼ相当するものであり、地域の拠点的な村落があったと考えられる。また一段古い時代からの発展もうかがわれるなど、局部的な調査ではあるがその成果は大きいといえよう。

（桑原真治・杉原清一）

参考文献

『湖陵町誌』　湖陵町（米山博敏）　S45

「島根県史一律令判時代」池田満雄『郷土史大系９』宝文館　S43

『出雲国風土記参究』加藤義成　今井書店　S56

『出雲の古代史』門脇禎二　ＮＨＫブックス　S51

「出雲地方に於ける歴史時代須恵器の編年試論」柳浦俊一　『松江考古３号』　1980

『陶邑』　大阪府教育委員会　1979

『高広遺跡発掘調査報告』　島根県教育委員会　1984

「出雲国大祝賑給歴名帳―天平11年―」正倉院文書『新修島根県史』史料編１島根県　S41

『庭反Ⅱ遺跡　緊急発掘調査報告―昭和60年度』　湖陵町教育委員会　1986

『渋谷遺跡他発掘調査報告』　横田町教育委員会　1982

PL 1

庭反Ⅱ遺跡遠景（北より）

耕土排除作業

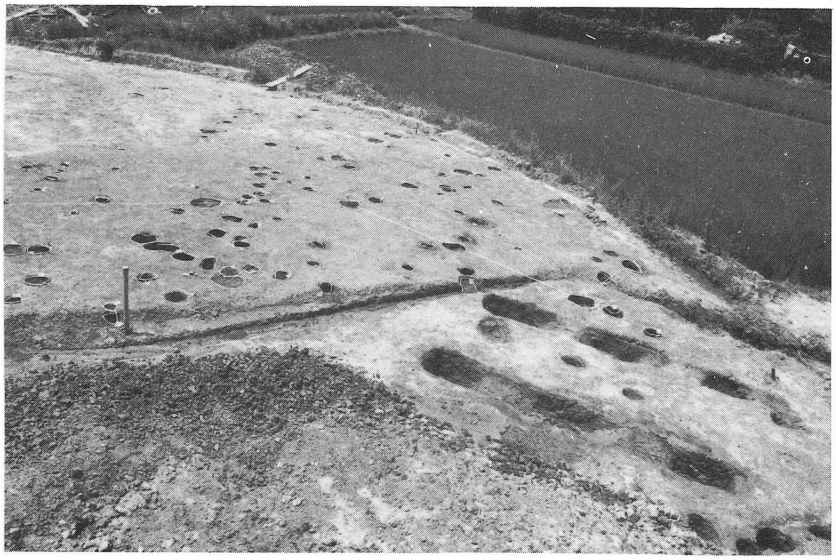
作業風景

近　景（東より）

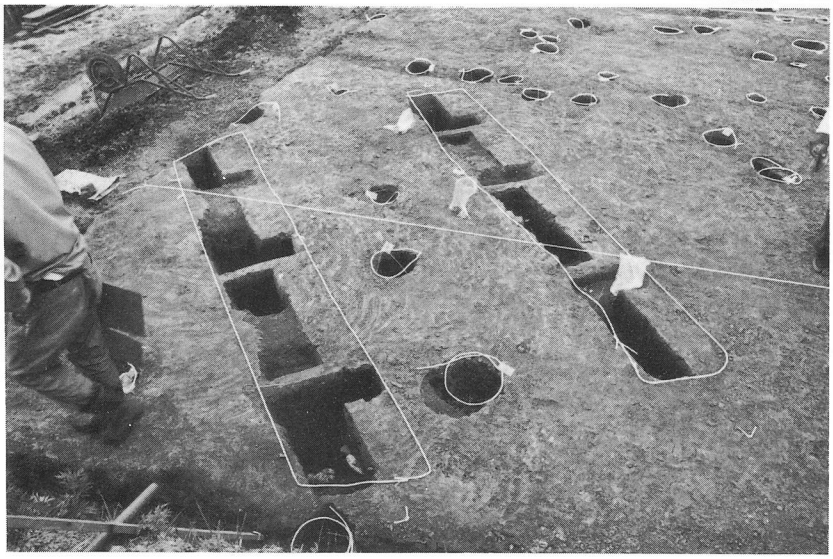
ピット状落ち込み検出

完掘状況（1）

完掘状況(2)



完掘状況(3)

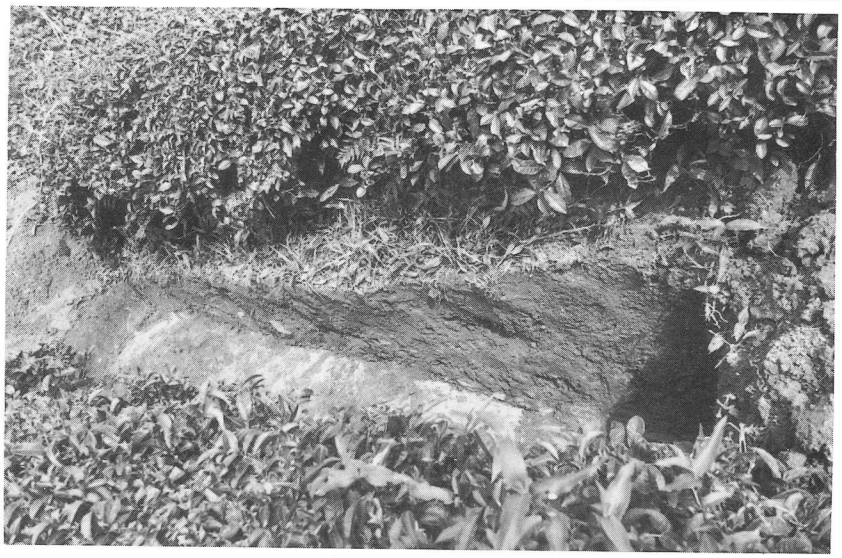


遺構XVII

遺構XVIIと建物

谷田グリッド設定

（南西より）



狩山地区トレンチ

PL 5

馬場地区トレンチ

馬場地区トレンチ

高丸地区トレンチ

高丸地区トレンチ

庭反Ⅱ遺跡と西蓮寺山古墳群（北より）

西蓮寺山古墳群墳丘（東より）

PL 7

縦断トレンチ　西蓮寺山古墳

同　上

横断トレンチ　同　上

土 師 系

図9.

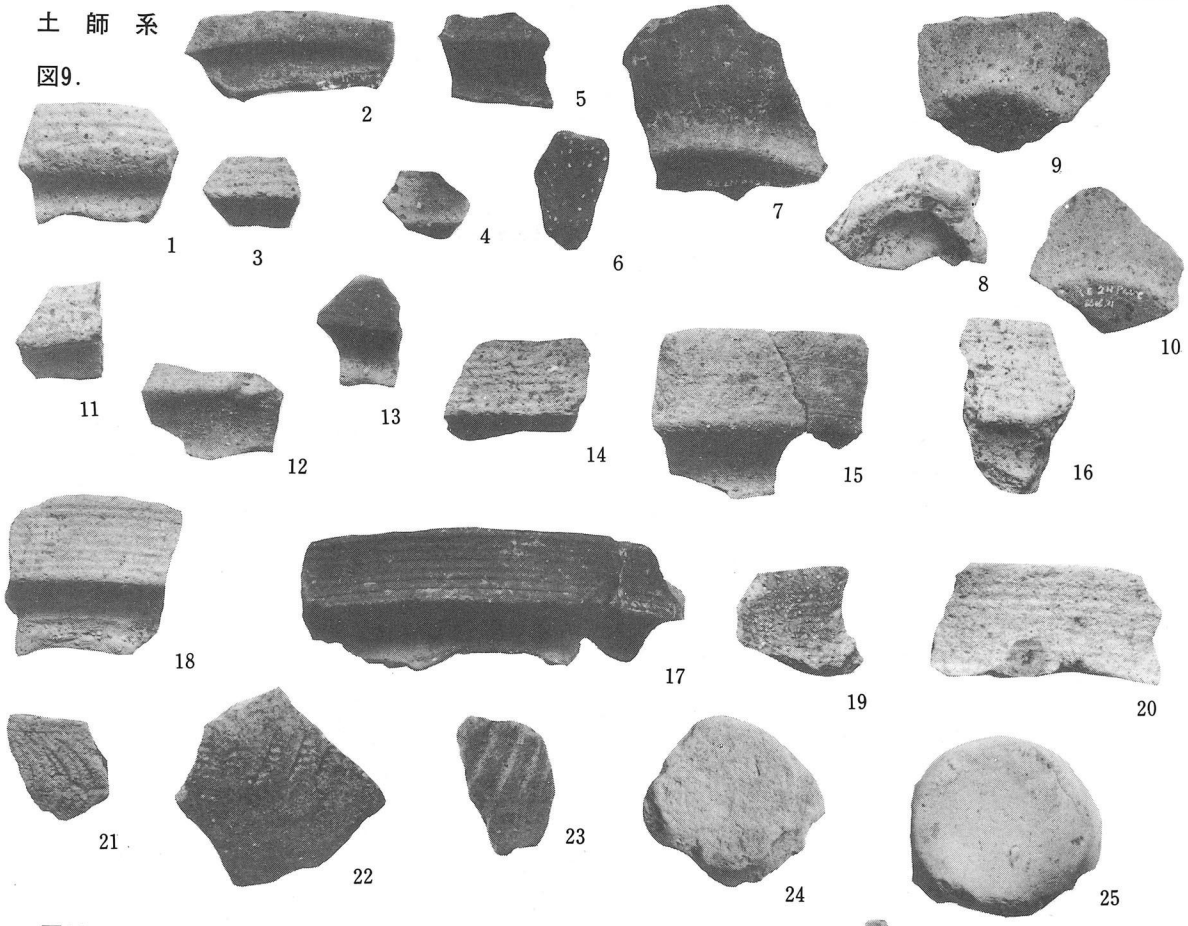
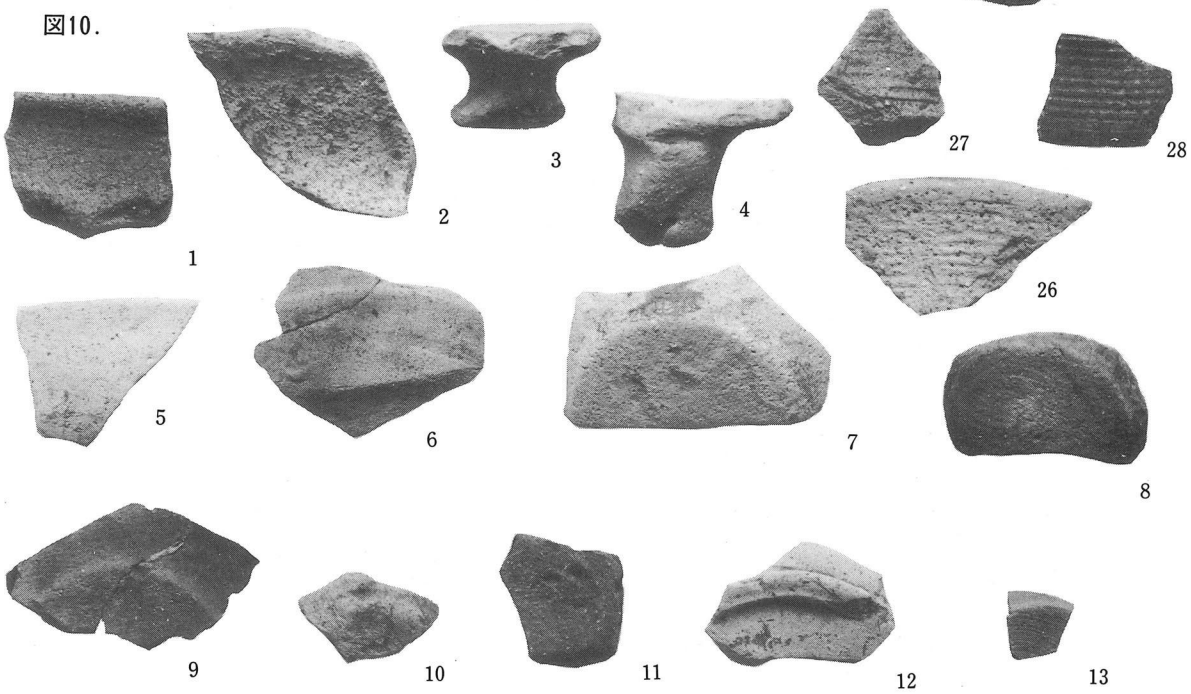


図10.

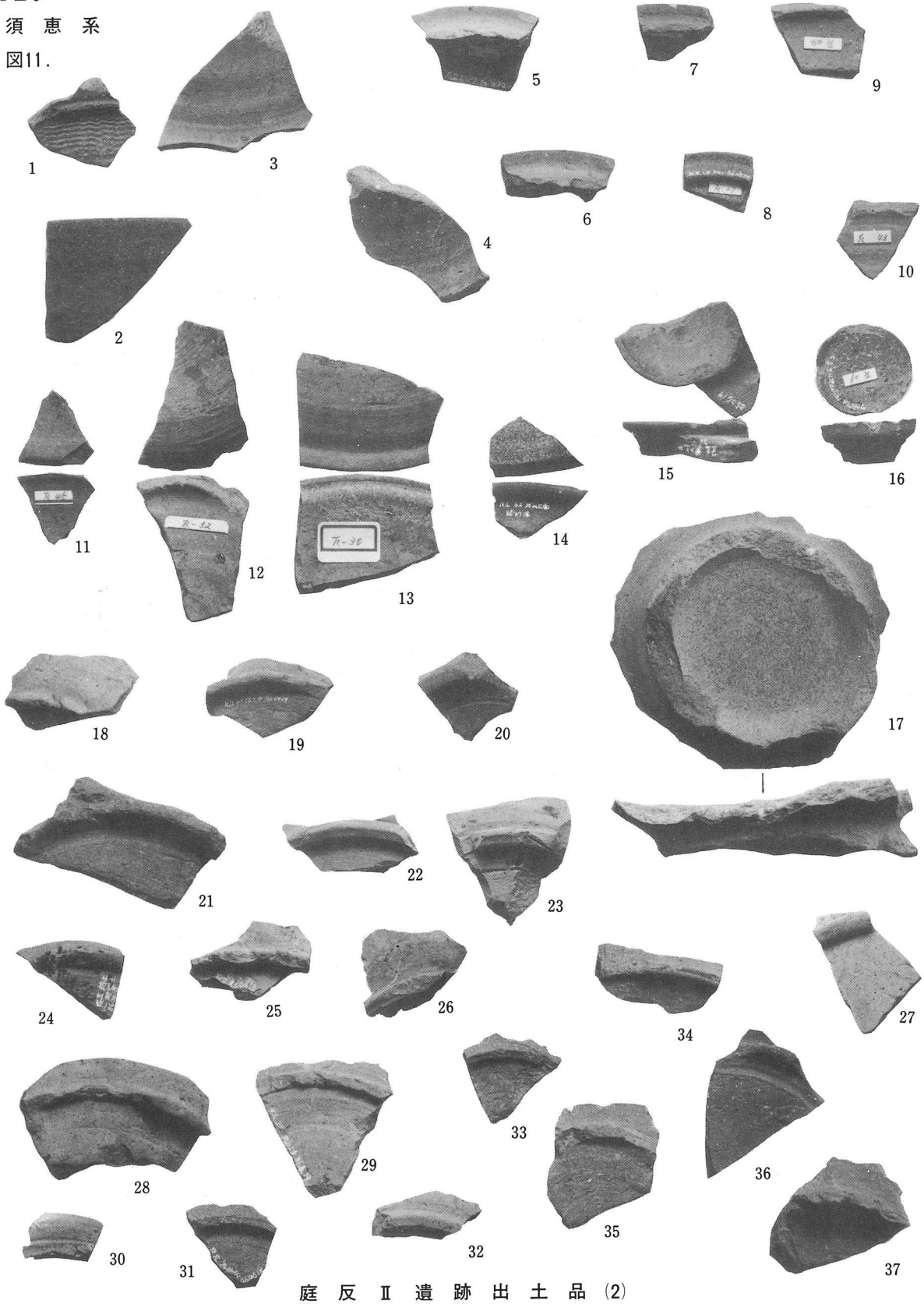


庭 反 Ⅱ 遺 跡 出 土 品 (1)

PL 9

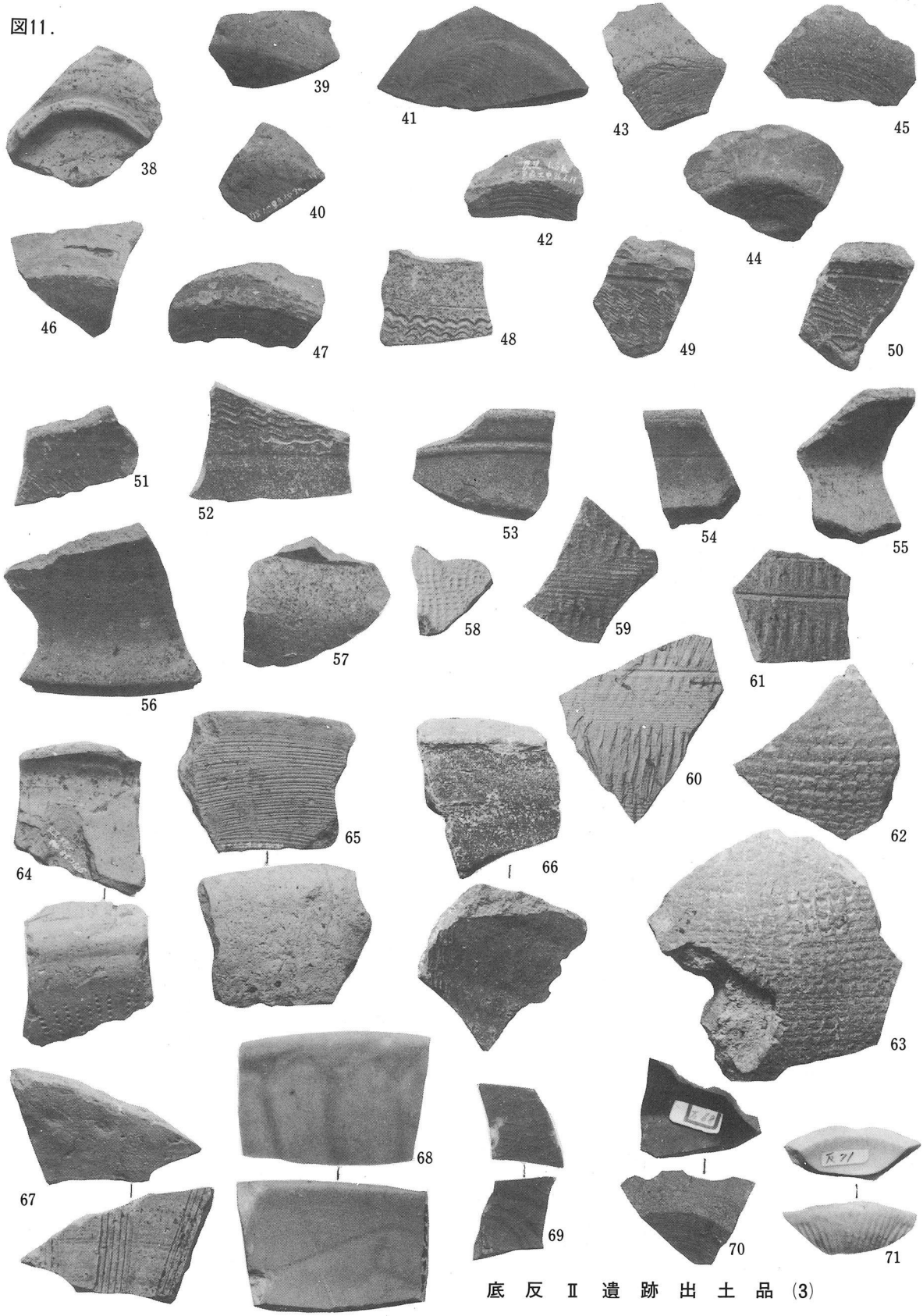
須 恵 系

図11.



庭 反 Ⅱ 遺 跡 出 土 品 (2)

図11.

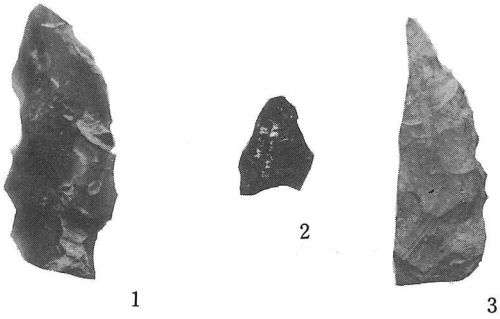


底反Ⅱ遺跡出土品(3)

PL11

その他

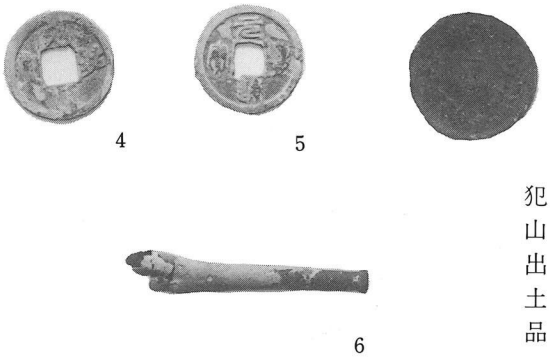
図12.



1　2　3

庭反Ⅱ遺跡出土品(4)

図13.

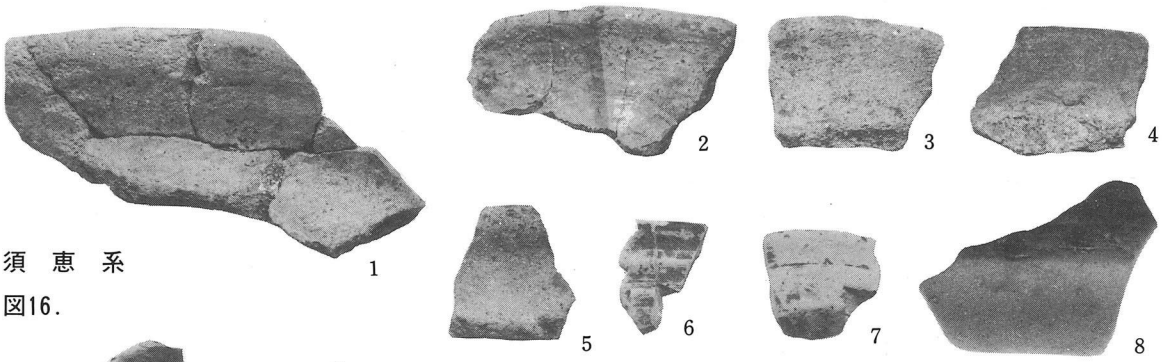


4　5　6

犯山出土品

土師系

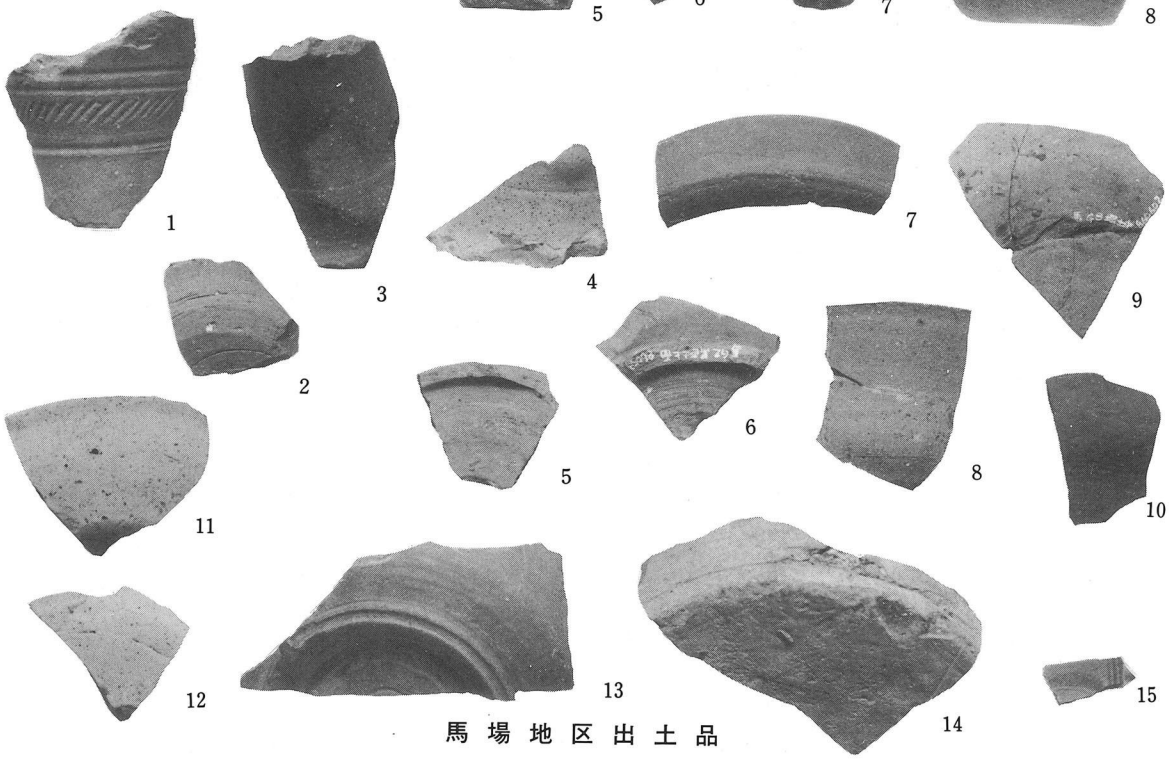
図15.



1　2　3　4　5　6　7　8

須恵系

図16.



1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　11　12　13　14　15

馬場地区出土品

付　編

常楽寺遺跡発掘調査概要

島根県教育委員会主事　ト　部　吉　博

1．調　査　地　　島根県簸川郡湖陵町常楽寺

2．調査主体者　　湖陵町教育委員会

3．調 査 期 間　　昭和56年４月14日から昭和56年４月27日迄

4．調査担当者　　ト部吉博　島根県教育委員会文化課主事

5．調 査 指 導　　島根県教育委員会文化課

Ⅰ　調査の概要

発掘調査は、湖陵町町営住宅予定地工事中の丘陵上で実施した。調査は住宅建築予定地（第１調査区）と用水路予定地（第２調査区）の２か所で行った。調査面積は第１調査区が約440㎡、第２調査区が約20㎡であった。

調査を実施した丘陵は北に神西湖を望むことができ、東には水田が広がっているところである。水田面との比高は第１調査区では約13m、第２調査区では約16mである。この丘陵の歴史は定かではないが、動物などの化石が採取されていることから概ね第三紀には動物が生活していたようである。

1．第１調査区

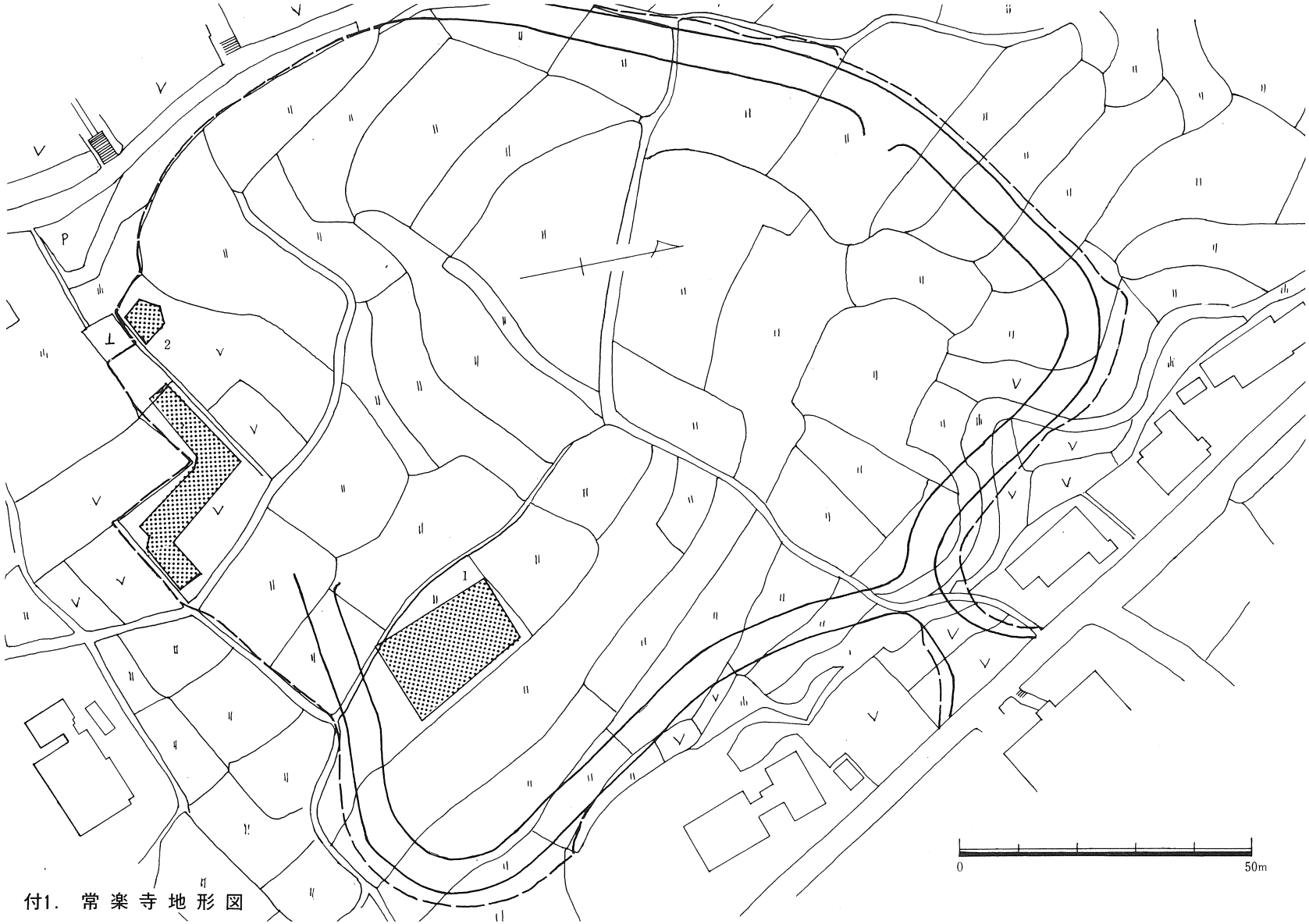
第１調査区では堀立柱穴建物２、土壙２、住居造成地跡１、柱穴多数が検出され、土師器・須恵器・青磁片が出土した。既に重機によって表土が除去された状態であったので住居造成地跡を除いて遺構面に伴う遺物は検出されなかった。

ＳＢ01

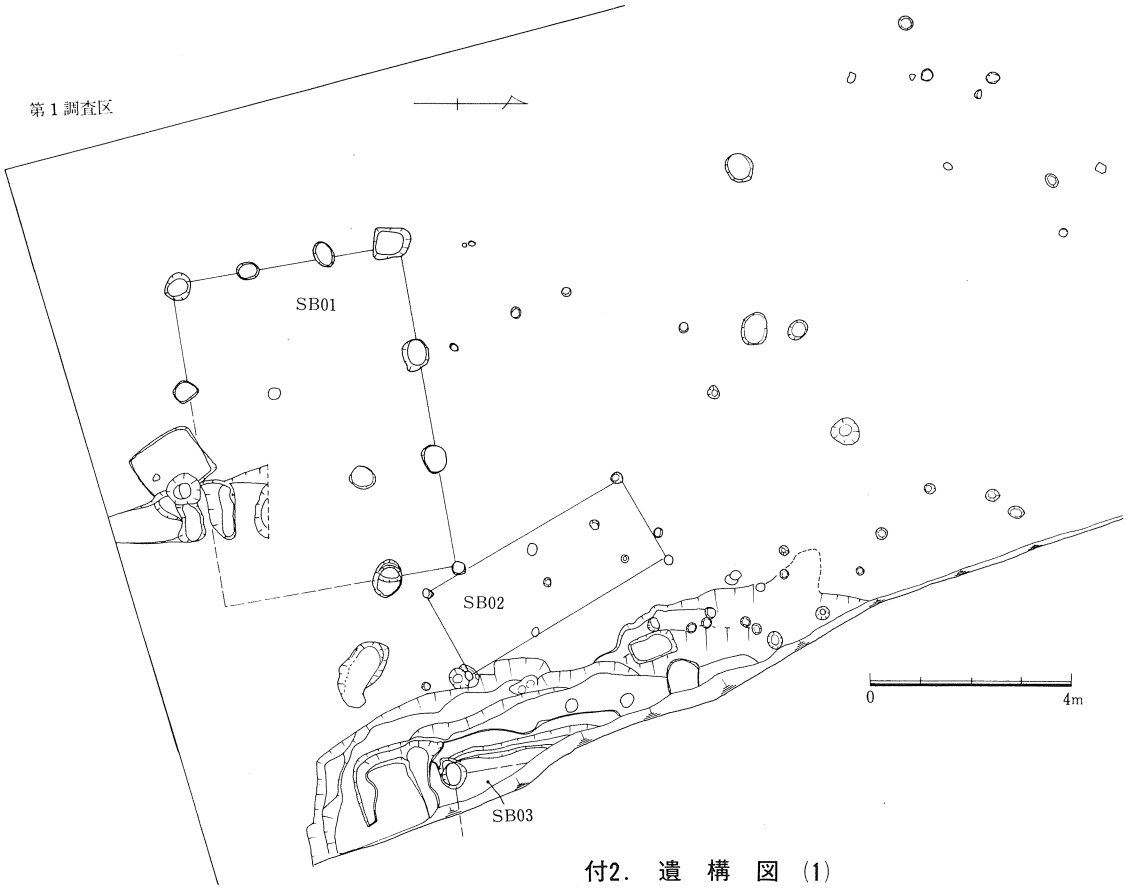
３間×３間の建物である。磁北に対して若干西に偏り、東西にやや長い建物である。柱間寸法は東西で2.2m、南北で1.56mである。

ＳＢ03

住居造成地跡である。丘陵の斜面の山側を切工して造成するもので、造成地の肩部の方位はＳＢ01とほぼ同じである。一部に柱穴が認められることから堀立建物があったのではないかと想定される。この遺構に伴う遺物は土師器・須恵器があり、今後の検討が必要であるが概ね奈良時代から平安時代の所産と考えられる。



付1. 常楽寺地形図



付2. 遺 構 図 (1)

2. 第2調査区

第2調査区では調査の幅が狭かったので遺構の性格がはっきりと把えられない部分が多かった。しかしながら、柱根の残存する柱穴群や、詰め石をする柱穴があって注目された。またこの調査区の西端には貝塚が存在していた。

ＳＢ04

柱根を残す柱列である。磁北から西へ約30°偏っている。南北に4間確認されており、柱間寸法は2.1mである。建物の全容が明らかでなく、今後の調査が期待される。

貝塚

共伴する建物から平安時代を下らない時期のものであろう。貝はシジミと考えられるが、今後の同定をまちたい。

Ⅱ まとめ

今回の調査で得られた成果は少なくない。まだ遺物等の整理に着手していない現在ですら、数多くの新知見を得ることができている。第1調査区ではＳＢ01・ＳＢ03など、しっかりした建物の跡を検出することができ、第2調査区でもＳＢ04・貝塚などが検出された

第２調査区

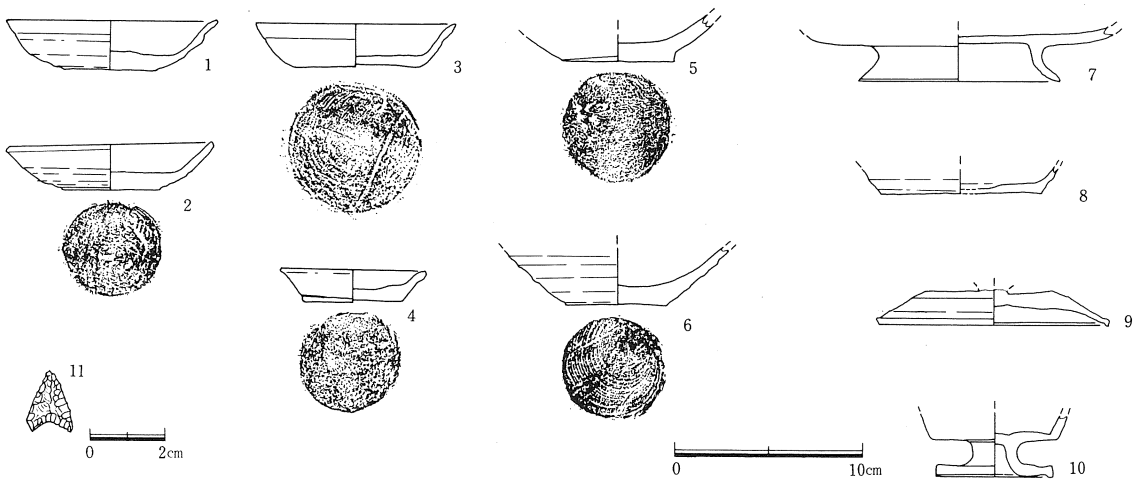
SB04

0　4m

第２調査区西部

貝散布

付3. 遺　構　図 (2)



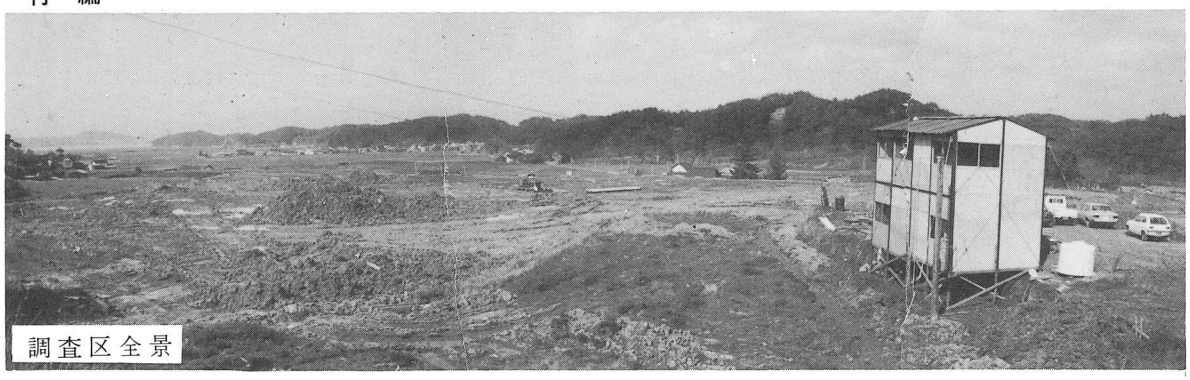
付4. 遺　物　図

こと、第1調査区で多量に出土した土師器は赤色顔料が塗られているものが大部分を占めたことなどである。

島根県下に於いては集落跡の調査はあまり実施されていないが、出雲西部では出雲市天神遺跡に次ぐ調査であり、この地域に於ける集落跡の一端を明らかにしたといえる。また、この集落跡が貝塚を伴っている点でこの集落の生活内容を把握出来る貴重な遺跡であるといえよう。

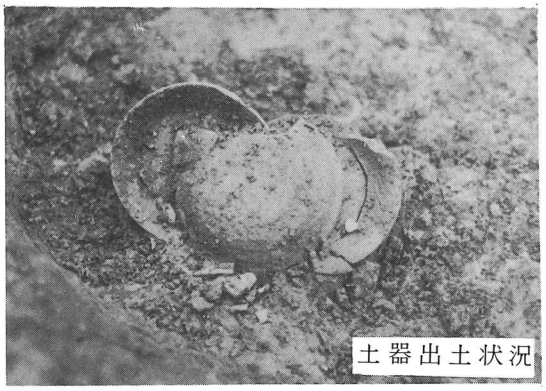
今回の調査では常楽寺の丘陵のごく限定された面積しか調査できず、集落跡全体から見ても、住居跡からみても、いたって不充分の調査しか行なわれていない。今後、残された工事区域内では充分な調査が必要である。

(以上1981年4月稿による)


調査区全景

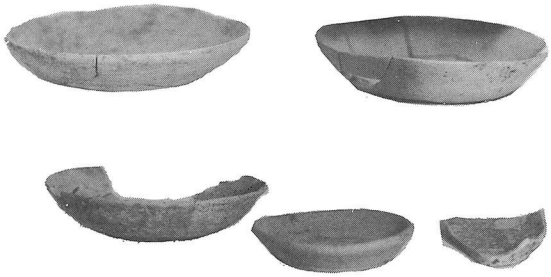
第２調査区

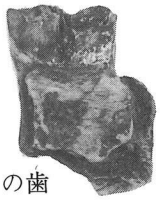
柱根とピット


土器出土状況

須恵器

土師質土器




シカの歯

石鏃

常　楽　寺　遺　跡

庭　反　Ⅱ　遺　跡　・　他

―昭和61年度調査報告書―

昭　和　62　年　1　月

発行　湖　陵　町　教　育　委　員　会
島根県簸川郡湖陵町

印刷　㈲　木　次　印　刷